

WEB公開版

平成 23 年 度

日野市立教育センター紀要

第 8 集



日野市立教育センター

教育センターの一年から



2月 調査研究事業発表会



2月 教育センター運営審議会



9月 教育センター・避難訓練



7月 わかば教室 スポーツ大会



8月 郷土教育一日研修会



2月 理科 CST講座

目 次

教育センターの1年	1
あいさつ	
「教育センター紀要第8集の発刊にあたって」 日野市立教育センター所長 加 島 俊 雄	4
「教育センターへの期待」 日野市教育委員会教育長 米 田 裕 治	5
教育センターの部・係(担当)	6
I 調査研究部の事業	
1 教育経営係 「I C T教育推進研究」	7
2 教科等教育係 「理科教育推進研究」	11
3 ふるさと教育係 「郷土教育推進研究」	21
4 基礎調査研究係 「ひのっ子教育21開発委員会の研究」	31
5 教育資料・広報係	43
II 研修部の事業	
1 教職員研修係	47
III 相談部の事業	
1 一般教育相談係	51
2 学校生活相談係	61
3 学校生活相談係 「不登校児童・生徒への学習支援：eラーニングの実施」	69
4 学校生活相談係 「登校支援コーディネータの報告」	71
資 料	
日野市立教育センター設置条例・施行規則	73
日野市適応指導教室設置要綱	75
編集後記	78

— 教育センター紀要第8集の発刊にあたって —

日野市立教育センター所長 加島 俊雄

平成23年は、東日本大震災の年、原子力発電所の事故の年として長く記憶にとどめるべき年となりました。被災者の支援、災害地の復興と並んで日本及び日本人の行方、これからについても大きな問いかけがありました。

この大災害に教育の世界はどう取り組むのか、日野市のシンクタンクとしての教育センターもこれに向き合い考えていく必要があると思っています。

さて平成23年度の「日野市立教育センター紀要第8集」がまとまりました。

教育センターの23年度の事業は、調査研究、教員研修、相談の3つです。課題を抱えながらもそれぞれ所期の目標を達成できたと考えていますが、特に次の3点については取り組みが進みました。

ひとつは、教育センターのWebサイトの充実です。

教育センターの調査研究はかねてから高い評価を受けながらも、その普及・活用が課題となってきました。そこで、調査研究報告書を順次Webサイトにアップしたところたくさんのアクセスが見られるようになりました。日野市の各学校の授業研究の報告書も合わせて掲載することにより、教育センターのWebサイトを日野市における「授業研究の情報センター」にしていきたいと思っています。

ふたつは、教育センターをめぐるネットワークに広がりや厚みが見られることです。

3事業のそれぞれについて、学校はもとより、関係者、関係機関、地域との結びつきを深めています。例えば、各学校に配布した「日野の生きもの」(DVD)は、市民が製作する過程で教育センターが協力しています。また、本年度配置された登校支援コーディネータは、不登校児童・生徒の支援をめぐる横の連絡調整に機動力を発揮してきました。市長部局の発達支援室等との連携が進んだことも意義深いことです。

みっつは、わかば教室の進路指導が充実してきたことです。

わかば教室に通室して最終学年を迎えた小学校・中学校の子どもたちの大きな関心は、次の進路にあります。中学3年生にはよき指導陣を得て、受験に向けて保護者・学校との連絡を密にしながら手厚い支援・指導体制を組みました。各生徒の努力が、進路に結びつくことを願っています。

平成24年2月に開催された教育センターの運営審議会では、各事業の実施状況について一定の評価をいただくとともに、「教育のまち日野」における3事業の意義・重要性や来年度の事業展開に向けて大きな示唆を受けました。また、幼稚園園長会、小学校校長会、中学校校長会から教育センターの事業運営について貴重なご意見をいただいています。「より役立つ教育センター」、「よりやりがいのある教育センター」を目指して所員一同いっそう努力してまいります。

最後になりましたが、皆様方から賜りました教育センターに対するご理解とご支援に心から御礼を申し上げます。

教育センターへの期待

日野市教育委員会教育長 米田 裕治

社会の変化が激しい時代の中で、子どもたちに知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育むことが求められています。

昨年、私たちは、東日本大震災を体験しました。かつてない災害の中で、被災地の復興のため、目の前の子どもたちのために何ができるか、真剣に考えてきました。これからの時代は、予測のつかない事態が地球規模で起こることが予想されます。「まず自分の命を守り、次に身近な人を助け、さらに地域に貢献できる人材を育成する」―防災教育の視点は、「生きる力」を育むことにつながっています。

子どもたちの学ぶ意欲を高め、思考力、判断力、表現力を育むには、授業の質を高めることが必要です。日野市は、全国有数のＩＣＴ環境を整え、先生たちのＩＣＴ活用力を高めてきました。

ＩＣＴが授業において子どもたちの興味・関心を高めることは、これまでの研究からも明らかですが、今年度のＩＣＴ活用研究では、「一斉学習、個別学習、協働学習」など、子どもたちの学びを深める様々な授業形態をさらに工夫してきました。先生方の実践は、「ＩＣＴ活用実践事例集」として、誰もが研究成果を土台に、さらに授業を工夫する手だてとして共有化されています。日野市におけるＩＣＴ活用が、日常的で、継続的なものになったのは、教育センターの調査研究事業として取り組んだこれまでの成果が大きく関わっています。

若手教員の育成も大切な課題です。日野市では１年次の教員が３１名、２年次教員４７名、３年次教員が３９名います。教職への意欲と熱意にあふれた先生方が、子どもたちと共に過ごす喜びを忘れず、信頼関係を結びながら教壇に立ち、分かる授業、学ぶ楽しさを感じる授業を日々実践されることを願っています。日野市では、指導主事、教育センターの研修係が授業観察や学校の求めに応じた支援を行っていますが、先生方が確かな授業力、生活指導力を身に付ける上で、研修部の役割はますます大きくなるものと思います。

授業力の向上には、日野市の調査研究事業において先生方がチームになり、教材開発や指導法の研究を重ねておられることも大きく寄与しています。郷土教育推進研究では、先生方自身が、日野の自然・歴史・文化・産業などについて新たに知る喜びを味わい、研究の楽しさに目覚め、その実践を広く市内学校に広めています。

また、ひのっ子教育２１開発委員会では、小・中学校の先生方が共同で、小学校外国語活動、中学校外国語（英語）の指導法、アクティビティ、教材・教具、評価等の研究に取り組み、２年間の集大成を発表されました。小・中学校の指導の継続性を大切にした連携、発達段階に即した指導法の在り方、子どもたちが目を輝かせる教材・教具の開発、各校の指導の在り方に力を発揮する教員の育成など、日野市が目指す教員の授業力向上と教科教育の研究がここに結実しています。

教育センターは、学校や関係機関等とのネットワーク、情報教育センター機能を充実させ、より役立つ教育センターとして、ますます事業の充実を図っています。今後も、日野市の子どもたちの学びと健やかな成長を支える教育・研究機関として、学校や地域、先生方の願いを生かし、「教育のまち日野」を実現する様々な事業を展開していただきますことを期待しております。

平成23年度 教育センターの部・係〈担当〉

所 長		加 島 俊 雄
主任研究員	教育部参事	大 野 正 人
教育センター担当指導主事		小 林 邦 子
事 務 長		渡 辺 秀 樹
調査研究部	○印（係主担当）	
●教育経営係	「ICT教育推進研究」	○上 條 茂
		菊 川 民 雄
		下 山 栄 子
●教科等教育係	「理科教育推進研究」	○島 崎 忠 志
●ふるさと教育係	「郷土教育推進研究」	○小 杉 博 司
●基礎調査研究係	「ひのっ子教育21開発委員会研究」 主任	○原 田 由美子
	ー小学校外国語活動と中学校外国語の円滑な接続ー	
●教育資料・広報係	図書・資料の整理・貸出，所報・紀要の編集	○坂 井 洽 子
		原 田 由美子
	センターHP・電子化等	主任 ○河 野 和 昌
研 修 部		
●教職員研修係		主任 ○二 馬 誠志郎
〃		○山 形 正 夫
〃		依 田 明
〃		小 杉 博 司
〃		島 崎 忠 志
〃		大 野 哲 郎
〃		上 條 茂
相 談 部		
●一般教育相談係	教育相談，電話相談，学校等訪問，研修，『研究紀要』	
		主任 ○依 田 明
〃	教育相談員（カウンセラー）	○望 月 桂
〃	〃	○織 田 順
〃	〃	○渡 辺 弥 生
〃	〃	○富 永 和 喜
〃	〃	○遠 藤 香
●学校生活相談係	「適応指導（わかば）教室運営」	主任 ○佐 藤 清 隆
〃	「 〃 」	○大 野 哲 郎
〃	「 〃 」	○鈴 木 晴 敏
〃	登校支援コーディネータ（健全育成を含む	○柳 元 太 郎
〃	「eラーニング」（登校支援員）	○下 山 栄 子
〃	「eラーニング」（ICT教育推進を含む）	○菊 川 民 雄
〃	適応指導教室カウンセラー	○佐 藤 充
〃	〃	○中 島 理 恵
〃	（学校課出向）	○佐 原 澄 夫
事 務 部		
●事務職員		○弘 田 裕 子
		○石 田 誠 一
		○鷹 取 孝

A 調査研究部の事業

- 1 教育経営係
- 2 教科等教育係
- 3 ふるさと教育係
- 4 基礎調査研究係
- 5 教育資料・広報係



日野の自然の教材化（理科教育推進委員会）

1 教育経営係

ICTを活用した教育の実践的な研究

ICT活用研究委員会

I 「教育の情報化ビジョン」を受けて

文部科学省では、平成23年4月28日に、初等中等段階における情報の教育化に関する総合的な推進方策である「教育の情報化ビジョン」を発表した。これは、文部科学省の「学校教育の情報化に関する懇談会」における検討や「新たな情報通信戦略」等の動向を踏まえて取りまとめたものであるが、これには日野市の実践例も取り入れられている。

内容は「21世紀に生きる子どもたちに求められる力」「21世紀のふさわしい学校教育の情報化の果たす役割」（学びのイノベーション）を基に「情報教育」「教科指導における情報通信技術の活用」「校務通信技術の活用」「校務の情報化」「特別支援教育における情報通信技術の活用」「教員への支援の在り方」「学校教育の情報化の着実な推進に向けて」と、今後の情報化教育の展望を述べたものとなっている。これを受けて、ソフト・ヒューマン・ハードの面で全国的な取り組みが推進されることとなる。日野市もこのビジョンに沿って「ICT活用教育の新たなビジョン」（案）を策定した。

ICT活用研究委員会は、国及び市の動向を踏まえながら、ハード面の環境整備、教科指導における情報通信技術の活用、校務の情報化等を観点に「ICT環境整備の入れ替え・検討」「ICTマークの全校取得」「ICT授業事例実践集の充実」の三つを柱として研究を行ってきた。

なお、教育センターのこの研究は本年度をもってひと区切りとし、その機能はICT活用教育推進室に引き継ぐこととなった。

平成23年度 ICT活用研究委員会・組織（平成23年4月1日付けのもの）

学識経験者	信州大学教育学部 東原義訓教授		
委員長	平山小学校 五十嵐俊子校長		
副委員長	大坂上中学校 岡部秀敏校長		
担当副校長	日野第四小学校 有賀康美副校長	三沢中学校 三浦利信副校長	
情報システム課	長谷川浩之課長	関裕実主査	野島孝行主任
教育委員会	佐野榮一教育部長 佐藤正明指導主事		
教育委員会庶務課	中島政和課長	中田秀幸課長補佐	清水辰也主査
ICT活用教育推進室	梶野明信室長	関戸寿憲主任	上野浩司主任
教育センター所員	上條茂	菊川民雄	下山栄子

Ⅱ 研究の目的

- (1) 今年度のリース切り替えに伴う環境整備のあり方を決定し、入れ替え作業を実施する。
- (2) I C Tマークの全校取得の推進
 - ・「セキュリティ部門」「授業部門」「校務部門」の三つの審査に全校が合格する。
- (3) I C T活用実践事例集を充実させる。
 - ・小学校は全校から優れた実践を集め、掲載数を追加する。
 - ・中学校は、全教科の実践を複数集める。

各校、各学期に1事例以上を提出する。事前に予定を収集して教科や活用法により取り上げる事例を調整してW e bサイトに掲載する。

Ⅲ 調査・研究内容

1 平成23年度のI C T環境の整備・充実

日野市ではI C T機器を導入して5年が経過した。5年間のリースが切れるため、様々な機器やソフトの等の入れ替えを行なうこととなった。そのためにI C T活用研究委員会では、機種の選定や作業実施計画を1学期中に決め、実際の作業を2学期に実施してきた。資料を素早く提示したり、視覚・聴覚に訴えて興味関心を高めたりして、授業に集中させることにより児童生徒の自らの学びと理解を深めることが今まで以上に期待される。「書画カメラ・e黒板」については、I C T活用推進委員会が開かれ、各学校のI C T担当が熱心に実技研修をした。この研修を受けて、各学校で新しい機器の活用がされることとなる。新たに整備がされたことにより更に日野市の教育を高めることが重要となってきた。

【導入された新しい機器】

旧のI C T機器	更新されたI C T機器
【小・中学校】 ・校務支援用パソコン 【小学校】 ・授業用パソコン	【小・中学校】 ・校務パソコン+授業用パソコン ＊2台のパソコン1台にする ＊U S Bキー+パスワードで確認
【小学校】 ・プロジェクター&スクリーンのセット	【小学校】 ・小型プロジェクター 数台 ＊明るく黒板にも投影が可能
【小学校】 書画カメラ, e黒板	【小学校】 書画カメラ&末端 ＊普通教室+特別教室
【小・中学校】 ・職員室プリンタ ・職員室デスクトップ	【小・中学校】 ・モノクロレイザープリンタ ＊2台 ・デスクトップパソコン ＊スキャナーを整備

【書画カメラ&e黒板】



【校務+授業用パソコン】



2 日野市独自の『ICTマーク』の審査・取得（結果）

平成20年度から日野市は、全小中学校でのICT活用教育の一層の前進、日常化を図るため日野市独自の『ICTマーク』の審査制度を創設している。審査は、「セキュリティ部門（10項目）」「授業での活用部門（5項目）」「校務での活用部門（5項目）」の3部門で行なわれた。審査項目ごとに5段階の達成基準を決め4段階以上を合格とすることにした。達成基準をクリアした学校には部門ごとに日野市の『ICTマーク』が教育委員会から授与された。

（1）セキュリティ部門

教員は情報の持ち出しが必要な場合使用台帳に記載し管理職の承認を受ける、セキュリティカードの保管などに明確なルールがある、私物パソコン・記録媒体が一切存在しないなど10項目についてICT活用推進室、外部委託業者から審査を受けた。

結果は小中学校25校（全校）が合格。

（2）授業での活用部門

教員がICTを活用して教科の指導を行っている、児童・生徒がICTを活用して学習を行っている、情報安全教育の徹底など5項目について各学校が自己審査を行なった。

結果は、小学校15校（全17校）、中は4校（全8校）が合格。

（3）校務での活用部門

校務支援システムの週案時数管理機能、成績管理システムな項目について各学校が自己審査を行なった。

結果は、小学校15校（全17校）、中は5校（全8校）が合格。

（4）4年間の推移（小・中25校）

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
セキュリティ部門	5校	18校	25校	25校
授業での部門	3校	11校	15校	19校
校務での部門	4校	8校	16校	20校

3 『ICT活用実践事例集』の作成

今年度、ICT活用教育推進室のWebサイトに「動画」を挿入した実践例がアップした。「一斉授業」「個別授業」「協働授業」の授業形態が示されたり「ICT活用のポイント」「ICTを使う場面の解説」「ICT活用のポイント」「ICTを使う場面」「授業風景」「使用機器」の欄が設定されたりし、今まで以上に授業での活用が理解しやすくなった。今後、実践事例が集約されてくるので、Webサイトに掲載し、公開していく予定である。

【ＩＣＴ活用教育推進室のＷｅｂサイトに公開されている画面。「ＩＣＴ活用実践事例集」の所をクリックすると表示される。】



授業形態の区分が示される

教 科	授業形	学 年	単元名	領 域	授業者
-----	-----	-----	-----	-----	-----



ポイント（ＩＣＴ活用の効果）

本時のねらい

解説－授業の流れの中でどのようにＩＣＴ機器を使うのかが示されている。

〔授業風景〕




〔授業風景（ビデオ）画像をクリックすると動画が始まります。〕



図を見て発見したことを
書こう



視点を示しながら
発表



発見したこと全体から
言えること



黒板を使って整理



Webページで
調べる

【使用機器・ソフト・コンテンツ等】

授業の中で使われるＩＣＴ機器が示されている。

* 上図は「モデル図」として示しているのので、実際のＷｅｂサイトの場面とは異なっている。

2 教科等研究係

理 科 教 育 推 進 研 究

理科教育推進委員会

I 研究テーマ

「魅力ある理科授業の展開とひのっ子の学力の向上」
～理科支援センターを拠点とした教員研修を目指して～

II 研究の主旨

1 日野市学校教育基本構想

平成21年2月に策定された、日野市学校教育基本構想では「確かな学力の向上【ひのっ子学力向上プログラム】」の中で、「自然や科学技術・ものづくりへの関心を高めるために、教員の実践的研究・研修や必要な設備を整えて、理科教育の充実を図ります。・・・(省略)」(「主要施策」(6))と、述べている。

本委員会は、理科の実践研究や研修を通して教員の理科授業の充実を図り、理科教育を支援する施設・設備を整えること、日野市内外の理科に関する諸機関との連携を進めることを通して、日野市の理科教育を充実させることが求められている。そこで、教員研修の検討や理科授業をサポートするための方策、外部との連携など理科支援センターのあり方について研究を進めることとした。

2 これまでの経過

日野市学校教育基本構想に基づき、平成20年度に本研究が始まり、4年目になる。

平成20・21年度は、「ひのっ子教育21開発委員会」の「観察・実験融合型デジタル教材(理科ねっとわーく)の活用」研究と連携をして、同じ研究テーマのもと、研究を進めてきた。

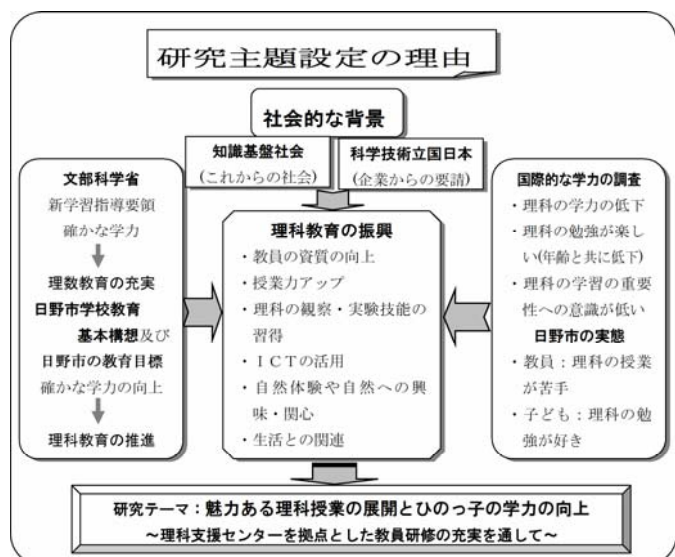
本年度は、これまでの研究成果も継承しつつ、昨年度の研究に引き続き、理科教育推進のため、理科支援センターを拠点とした教員研修充実を目指した研究を進める。

III 研究テーマ設定の理由

21世紀を新しい知識・情報・技術が社会のあらゆる面で飛躍的に重要性を増す

「知識基盤社会」と位置付けた社会的な背景や新学習指導要領、国際的な学力調査結果などから、理数教育・とりわけ理科教育の充実が課題である。

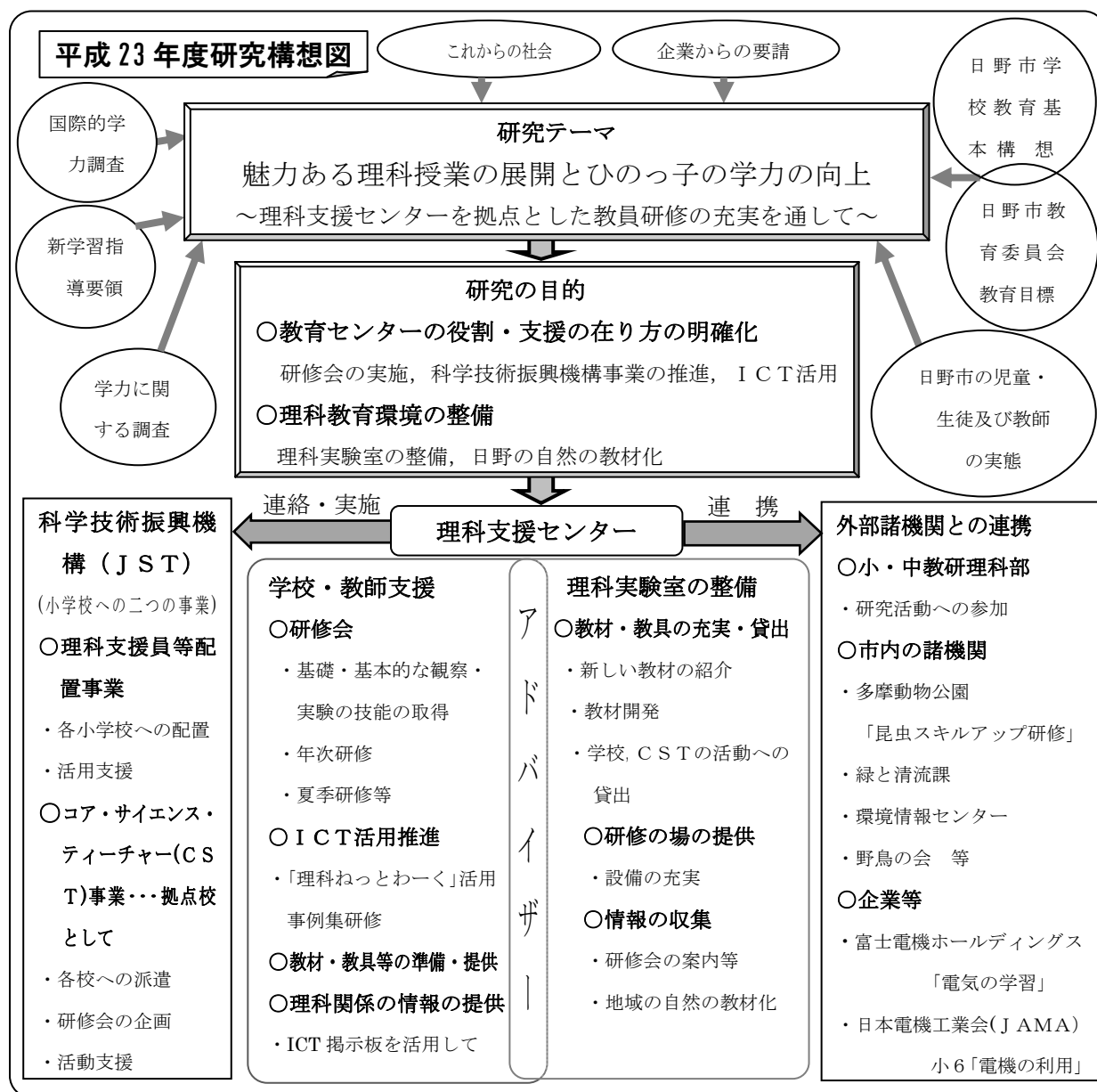
日野市においても、子どもの自然や科学技術・ものづくりへの関心を高める理科教育の推進が求められている。子どもが自然に



関心をもち、理科学習に生き生きと取り組む、魅力ある理科授業を展開できる教員を育成する必要がある。そのためには、(1) 教員に理科の観察や実験についての技能を習得させ、「理科ねっとわーく」などのデジタル教材の活用能力を高めること、(2) 自然体験や自然への興味や関心を高め、自然の事象を多面的に見、生活と結び付けて考える力を教員に培うことが重要である。教育センターの理科支援センターを中心に、教員に対して理科に関する研修や支援を行い、教師の授業力をアップさせることが、ひのっ子の学力向上にもつながることから、本研究テーマ及びサブテーマを設定した。

Ⅳ 研究の構想

本年度の研究の目的及び理科支援センターを中心とした研究内容を研究構想図にまとめた。



V 実 践

1 理科実技研修会

主に休業日中に研修の一環として、実技を中心とした研修会を実施した。今年度実施した研修を下の表にまとめた。

日 に ち	曜 日	研修会名	会 場	内 容	参加人数
4月22日 午後	金	昆虫研修	多摩動物公園	・モンシロチョウとアゲハチョウの飼育と観察の仕方	10 ※1
7月28日 午前	木	理科 実技研修	日野四小	[A区分] ・電気の学習 ・ものの温まり方、薬品の扱い方	8
7月28日 午後	木	理科 実技研修	日野四小	[B区分] ・観察カード、観察・実験器具の使い方・天気と気象	9
7月29日 午後	金	理科 実技研修	日野四小	・ICT、「理科ねっとわーく」 ・「生物と環境」	6
8月1日 午前	月	理科 実技研修	富士電機(株)・能力 開発センター	・発電と電気の利用 ・富士電機の発電設備見学	17
8月1日 午後	月	理科 実技研修	富士電機(株)・能力 開発センター	・電磁石のはたらき ・モーター作り	14
8月23日 全日	水	昆虫スキルア ップ研修	多摩動物公園	・アゲハチョウの観察と飼育の仕方 ・昆虫採集、仲間分け	28
12月26日 午前	月	理科教育セ ミナー	教育センター	・小6「電気の利用」学習プログ ラム研修（日本電機工業会）	25 ※2

※1：多摩動物公園主催の研修会に参加した日野市の教員数 ※2：中学校教員2名参加
次に、研修会の様子を報告する。

(1) 理科実技研修会：会場・日野第四小学校

研修会は、コア・サイエンス・ティーチャー（CST）の認定を受けた、日野第四小学校 栗木勇先生と旭が丘小学校、増田由香里先生が講師となって実施した。また、事前に行った内容の精選や、実際に実験を行う際の細かい注意点等は、CST専属理科支援員で、日野八小の大成鐸夫先生から多くの助言をいただいた。今年度の実技研修会には、理科部員が手伝いとして参加したため、参加者一人一人に声をかけ、ゆっくり説明し、じっくり操作する時間が取れた。理科教育推進研究委員も研究会に参加し、支援した。

研修の内容を考えるにあたっては、基礎的なものを中心に正しく安全に器具を扱ったり、実験を進めるための技能を、多く取り入れた。教科書に載っている実験を行うとともに、発展的な内容も少し紹介することにした。参加した先生方には、実物にさわって、器具等を操作しながら研修を進めることで、理科の楽しさを感じてもらいたいと考えた。

講師や指導の先生方は、1学期から夏季休業中何度も集まり、研修会の準備をしていた。

① 7月28日(木)午前：A区分 「エネルギー」・「粒子」の領域

○ 電気の単元で行う実験

- ・豆電球に明かりをつける
- ・電気の通り道
- ・光電池での光源と電流の関係

- ・電磁石のつくり方 ・モーター作り
- ・手回し発電機による発電 ・コンデンサー(蓄電)
- 「ふりこ」(5年)の実験
- 「もののあたまわり方」(4年)の実験
 - ・アルコールランプとガスバーナーの使い方
 - ・気化したアルコールの実験
 - ・水の対流実験
- 薬品の扱い方
 - ・塩酸, 水酸化ナトリウムの扱い方 ・希釈方法 ・廃棄方法(中和)
 - ・金属との反応 ・ムラサキキャベツ液での実験



※参加者の感想

- ・同学年の2年次の先生にも参加してほしかった。初任研等を兼ねるといいと思った。
- ・実験の基礎から教えていただき、とても勉強になりました。実験をスムーズに行えるようになることで、児童も意欲をもって授業が行えると思います。

② 7月28日(木)午後: B区分 「生命」・「地球」の領域

- 観察カードについて・・・カードの形式, 活用方法(事例研修)



- 気体検知管の使い方
- 観察用具の使い方と使い分け
 - ・虫めがね, ルーペ ・生物(光学)顕微鏡
 - ・解剖顕微鏡 ・双眼実体顕微鏡
- 天体の単元の観察・実験
 - ・星座早見の使い方(4年) ・月の見え方(6年)

- 「台風と気象情報」(5年)
 - ・OHPシートを利用した調べ学習(小教研理科部の実践より), ICTの活用

※参加者の感想

- ・顕微鏡の種類や使い方などを教えていただきながら、様々なものを観察することができました。2学期に学級で取り入れていきたいです。
- ・実体顕微鏡が使えるようになりました。

③ 7月29日(金)午後: デジタルコンテンツ(ICT)と「生物と環境」(6年)

- デジタルコンテンツの活用
 - ・「理科ねっとわーく」の教材リスト
 - ・「理科ねっとわーく」活用事例集の紹介
 - ・NHK等のデジタルコンテンツの紹介
- 「生物と環境」(6年)の観察・実験
 - ・簡易(手作り)ツルグレン装置を使った観察・実験
 - ・雲をつくる実験 ・気体検知管の使い方



※参加者の感想から

- ・実際に器具や道具を使い、楽しく教材研修ができました。また、安全面についても教えていただけた。(知らなかったことがたくさんありました。)
- ・デジタルコンテンツはすぐ使えるものを知ることができた。実際に活用したい。

☆ 講師の先生方がしっかりと事前準備をし、多くの方のご援助があったが、この3回の研修は、どれも参加者が少なかったことは残念であった。

(2) 理科実技研修会：富士電機㈱での電気に関わる実技研修

今年は、富士電機㈱の能力開発センターを会場にして実施した。講師は、今年も富士電機㈱応用技術開発部長の松本康様が務めてくださり、技術部門の専門スタッフの方々が支援をしてくださった。

① 8月1日（月）午前：発電と電気の利用（「電気の利用」6年）

- ・身近にある電気製品の電気を使う原理（電気の変換）
- ・電気をつくる（発電の仕組み） ・ 電気を貯める（蓄電方法）
- ・発電・蓄電の体験と産業への応用、省エネ
- ・富士電機㈱での発電施設（燃料電池、太陽光）見学



身近にある電気製品を取り上げ、電気は熱や光などに変えられ、利用される。この電気が熱や光などに変化する仕組みや、発電や蓄電の原理についても詳しく説明をしていただいた。途中では、発電や蓄電の体験が行われ、最後に、富士電機で実際に使用している発電装置・燃料電池や太陽光発電の施設を見学した。

※参加者の感想から

- ・電流や電圧の事などが分かりやすく、勉強になりました。質問にも答えていただき、大変勉強になりました。2学期から授業で生かしていきたいと思います。
- ・今回は、現地を見学させていただけるとのことで、楽しみにしておりました。6年担任なので、すぐに役立つ内容です。来年も期待しております。

② 8月1日（月）午後：「電磁石のはたらき」（5年）

- ・モーターの原理 ・ 手作りモーターの製作 ・ 鉄道車両・産業での応用製品



昨年とは違ったモーターを考案し、そのモーター作りに一人一人が挑戦した。モーターを実際を作ることを通して、モーターの原理に触れたり、長く回すための工夫したりするなど、体験を通して学んだ。先生方全員がモーターを完成させることができ、研修の最後は、自作のモーターを回す発表会をした。先生方は、自分のモーターが回るかドキドキだったようである。

中学校の電気や磁石の学習にも関係する内容が多く含まれていた。来年度は、中学校の先生方も参加できるよう研修を計画したい。

※ 参加者の感想から

- ・電磁石がどうしたら回るか、考えながら実験器具を作成することができた。モーター作中に分かりやすく教えていただけた。最後に回せてよかった。来年も受講したい。
- ・富士電機の皆様のアツイ思いに心打たれた。理科好きの子を育てるように努力します！

(3) 昆虫スキルアップ研修：8月23日（火） 多摩動物公園

本年度、多摩動物公園を会場にしての昆虫に関する研修は2回実施された。ここでは、日野市教育委員会主催の、夏季休業日中に実施した研修会の報告をする。

- 午前： ・ チョウの幼虫や成虫の行動観察 ・ アゲハチョウの各時期の観察や飼育方法
午後： ・ 野外での虫の捕獲実習 ・ 捕獲した昆虫の分類

午前は、
昆虫館で
のチョウ
の観察の
あと、ア



ゲハチョウの観察や飼育の仕方について研修した。

「たまご→幼虫→蛹→成虫」とアゲハチョウの成長の各段階に、一人一人の先生方が触れながら実習ができるよう、たくさんの資料が用意されていた。

午後は、野外での昆虫採集である。童心に帰って虫取りに興じる先生方がたくさん見られた。その後、捕まえた虫の仲間分けをした。

お土産はチョウの羽のリンブン転写です。とても綺麗に転写ができた。

※参加者の感想より

- ・昆虫館で必死に探していた自分がいます。ポイントをもつことの大切さが分かった。
- ・虫、特に幼虫は苦手でした。でも、卵から→幼虫→蛹→成虫と順を追って見て、触れることで、何だかかわいく感じてきたので驚いた。今後は少しやさしくなれそうです。実際に触れて学ぶということは、「生きものを大切」にする心を育てるのだということ、子どもたちにも大切なことなのだと身をもって体験しました。
- ・短い時間で様々な昆虫が採れ驚いた。カップで捕まえるとその後の観察もしやすい。
- ・授業でもこのようなまとめ方を行えば子ども達の興味と力につながると思いました。

(4) 理科教育セミナー：12月26日(月) 日本電機工業会による理科教育セミナー

小学校6年生「電気の利用」は、今年度から実施された学習指導要領で新しく導入された単元である。昨年度に引き続き日本電機工業会(JEEMA)による研修会を教育センター・理科実験室で実施した。2回目であるため昨年度より内容のグレードを上げ、「リーダー教員のためのスキルアップセミナー」とした。

コンデンサーや手回し発電機などの新しい教材に触れるだけでなく、実験がうまくいかない場合の対処方法、実験器具の選定や実験方法の検討についての実習も行った。

研修会には2名の中学校の理科の先生も参加した。



※参加者の感想より

- ・実際に実験をすることで、子どもたちが起こしそうな事態にも対応できる内容で、とても良かったです。(6年)
- ・実験結果として、丁度良い「差」、比較をしている目的が目で見えて分かるという、ほどよい格差をつけるには、どの豆電球とLEDの組み合わせが良いのかと、教具選びをすべきと思い知らされました。(中学校)

2 理科支援員等配置事業

本事業は、学校における理科教育の充実を目指して、小学校5・6年生の理科の授業に配置する事業である。日野市では

区 分 (人材源内訳)	理科支援員
学生 (大学生, 大学院生, 専門学校生等)	8 人
退職教員 (退職校長, 退職教頭, 退職教員等)	4 人
地域人材 (大学生, 退職教員, 講師経験者, 研究者, 企業関係者以外)	14 人
合 計	26 人

17校中16校から活用希望が出された。本年度、初めて理科支援員の配置を希望した学校もあり、日野市の全小学校が支援員の配置を経験した。理科支援員の配置時間は、年間1学級当たり平均6時間から8.5時間配置である。

学校の状況や教員の要望、理科支援員の実態などにより、活用方法は様々であった。

理科教育の経験が豊かな先生が理科支援員をしている学校では、学年会に出席し、支援の方法や単元について打ち合わせをした。・教科書に載っている実験をする、・原則として子ども2～3人の少人数グループで実験をする、などを確認した。予備実験や実験方法の指導、実験器具の準備などもした。また、T2として授業を支援し、必要に応じて担任に代わって授業を進めることもあった。理科支援員を活用している担任の先生からは「実験を少ない人数で行うことで、児童は前向きに実験に取り組むようになった。」との感想をいただいた。



3 コア・サイエンス・ティーチャー（CST）事業

本事業は、「理科が好きで得意な小学校教員を、指導力と教材開発に優れたCSTに育成し、各地で実施する理科教育に関する研修の講師として活躍することで、小学校教員の理科指導における指導力の向上を図る」ことを目的に、平成21年度より実施されている。

日野市では、日野第四小学校・栗木勇先生と旭が丘小学校・増田由香里先生の二人がCSTとしての認定を受け、本年度 滝合小学校・清水智先生が研修を受けている。CSTの活動を補佐してくださるCST理科専属支援員は、元教育センター所員・大澤真人先生、日野第八小学校・大成鐸夫先生である。

本年度のCSTの活動は次のとおりである。

(1) 研修会の講師(理科実技研修会参照)

(2) 巡回研修…CSTが学校に出向いて行う理科支援
本市にはCST加配で日野四小・栗木先生が配属され、学校への訪問を行った。



授業に関する指導では、・教科書に載っている実験の進め方、教材の選び方、事象との出会いの場の工夫や、問題を見いださせる指導法、などの質問が多く出された。

日野五小では、3年生「風やゴムのはたらき」の授業について指導をした。3年生の先生方が作成した指導案をもとに、単元の指導計画や指導の流れ、学習のポイントを指導した。その後、実験で使う車を広い教室で実際に動かしながら、教材の扱い方や授業の進め方、留意点などを話し合った。



こうした指導に引き続き、学校の要望に応じてT1として授業を行ったり、T2として実験の補助をしたりした。

日野六小では、学年会で5年生「電磁石のはたらき」の授業について指導をしたあと、T2として授業を支援した。電磁石を作るときにエナメル線を絡ませてしまう子どもたちが多く見られた。

そこで、担任に代わってエナメル線を絡ませないで巻く方法を指導した。

☆ 学校を訪問し、学年単位など少人数の先生に理科授業の進め方を指導したりすることで、質問が多く出され、先生方一人一人が納得できる教材研究や予備実験ができた。こうした中で、問題解決型の授業を試みる先生や観察・実験を大切にして授業を行おうとする先生方も多くなってきた。

(3) 理科室・理科準備室の視察

新学習指導要領で使用する器具等の整備状況や、理科室や理科準備室が使いやすいよう実験器具等が配置されているかを把握するために視察した。

学校により整備状況等に大きな差がみられたが、次のような点が課題に挙げられる。

- ・新学習指導要領に対応した教材・教具の種類や数が十分でない。
- ・新旧の教材が入り交じっていたり、使用した器具が放置されていたりする。
- ・ガラス器具等、実験に必要な基本的な器具の数が不足している。

教師にとっても、児童にとっても使いやすい理科室を目指して、理科室や理科準備室の整理、教材・教具の整備について、具体的に提案をしていく必要があると感じた。

(4) C S T 講座

日 に ち	曜	内 容
9月27日	火	太陽・月
10月26日	水	天体
11月25日	金	水の三態変化
12月20日	火	地層
1月23日	月	ふりこ
2月24日	金	電気
3月19日	月	生物の飼育・観察

時間：午後3時15分～

会場：日野第四小学校・理科室

今年度実施したC S T講座を表にした。

C S T講座では、研修内容に関係する教科書に出てくる実験をし、参加した先生方が困っている点や疑問点等を挙げてもらい、その内容に即した研修を行う前半と、単元に関連する理論を学ぶ後半で構成されている。講師はC S TとC S T専属理科支援員の先生方である。

12月の「地層」、1月の「ふりこ」の講座では、教科書に載っている実験を行った。その後、実験材料や実験方法の工夫、指導上の注意点などを、実演を交えながらC S Tが助言した。後半では、理科を指導する上で最低限知っておい

たほうがよいと思われる「地層のでき方」や「ふりこの振れ幅を短くする理由」など、理論的な背景をC S T専属理科支援員の先生からご指導いただいた。この講座は来年度も継続する予定である。

4 小・中学校教育研究会理科部との連携

理科教育推進研究委員会での話し合いがもとになり、小・中教研の理科担当の校長先生や部長の先生のご尽力で、互いに授業を見合う機会を設けることができた。

10月12日（水）の小教研の日に、旭が丘小学校で6年生「水溶液の性質」の研究授業があり、中教研の先生方も参加した。中学校の先生方からは、「問題意識が高まるよう授業が工夫されている。」「中学でもノート指導に力を入れている。」「児童が意外とマッチを使えていない。」といった発言があった。

11月2日（水）の中教研の日に、七生中学校3年生「宇宙」の研究授業があり、小学校の先生方が参加した。小学校の先生方からは、小学校、中学校での授業の進め方や子どもの体験



の少なさなどについての発言があった。

こうした小・中教研の理科部の中でも連携が始まったことは、これからの日野市の理科教育の充実に大いに寄与すると考える。

5 情報や教材の提供

理科支援センターとして情報提供や希望校への教材等の貸出・配布を行った。この情報は、スクールオフィスの「学校間掲示板」を利用して、市内の小・中学校の教員全員に向けて発信した。

「多摩川の石」(本)：多摩川・浅川の河原で見られる「多摩川の石鑑」、川や河原の学習活動、河原の石の学習、多摩川や浅川の河原の紹介が載っており、立日橋と一番橋付近の河

原が紹介されている。「多摩川の石」が返却される際書かれていたコメントでは次のようなものである。

- ・石に興味をもった子がいてとても役に立ちました。
- ・多摩川の学習の際に大変参考になるので、機会があればお借りしようと思います。
- 「大型てこ」：子どもが両側に乗っても壊れず、友だちを軽々持ち上げたり、重い物でも持ち上げたりできる。実際に使った学校からは、次のような声が寄せられた。
- ・全ての子どもが力の掛け具合などを体験できたため、意見や気づきがたくさん上がり、授業が盛り上がった。
- ・てこの原理やその有効性を、体を使って学習することで、学習事項を確実に身に付けることができた。
- ・もう1～2台あると、子どもたちが実験する時間が長く取れたかなと感じた。

☆ 物品の貸出のお知らせが、先生方に十分に伝わっていなかったことは、反省点である。

6 「日野の生きもの」の教材化

多摩平にお住まいの井上録郎様が撮影・編集した「日野の生きもの」を映像編と、資料・映像編をDVD 5枚にまとめ、7月に5枚を1セットにして市内の幼・小・中学校に配布した。

「日野の生きもの」のDVDを配布した幼・小・中学校に活用状況のアンケートを実施した。アンケートでは、映像を見た子どもたちは、年齢に関係なく、「日野の生きもの」の姿や種類の多さに驚いていたとのことでした。また、身の回りの生きものへの興味を醸成するきっかけにもなったとのことでした。当初幼稚園への配布は想定をしていなかったが、配布したほとんどの幼稚園が映像を活用していた。小学校では、理科で「生きの観察」や「四季の自然」の学習がある、中学年で多く活用されていた。中学校で、生物部が活用したとの報告もあった。

日野第三小学校では、「日野の生きもの」映像を使い、撮影した井上様を社会人講師として招き、4年生で授業を行った。

本年度作成予定の「日野の生きもの」第二弾では、アンケートで寄せられた改善点も考慮に入れて制作することを考えている。

情 報 の 提 供

- ・モンシロチョウの産卵予想
- ・理科関係の出前授業の紹介
- ・皆既月食
- ・酸性雨のあと(画像)
- ・「小学校理科の観察、実験の手引き」(文科学省ホームページを紹介)

教材等の貸出・配布

- ・モンシロチョウの卵と食草(セイヨウワサビ)の配布
- ・多摩川の石(本)
- ・大型の実験用てこ
- ・発電・蓄電実験セット(富士電機より)
- ・示温インク(サーモインク)の貸出



VI 研究のまとめ

1 研究の成果

理科教育推進研究委員会を中心に、1年間研究を進める中で、次のような成果が得られた。

- 教員の研修会は、長期休業日中に実施した。参加者からのアンケートでは、どの研修会も授業に役立つ内容との高い評価を多く得られた。
- 多摩動物公園や富士電機、日本電機工業会など連携して研修会をもつことができた。
- 理科支援員等配置事業はどの小学校でも活用されるようになった。本年度は、小学校17校中16校に理科支援員を配置した。
- コア・サイエンス・ティーチャー事業は、夏季休業日中の研修会での講師以外に、毎月行う研修会として「CST講座」を新しく設けることができた。
- CST加配の栗木勇先生（日野第四小学校）による学校の理科授業への派遣や理科室の実情把握のための視察は、合計で31回実施した。特に、各校への派遣では、指導に関する研修のほかに、実際に授業に参加しての支援も行い、理科授業の充実に寄与することができた。
- 本委員会の話し合いがもとになり、小・中教研の理科部が互いに授業を見合い、研究協議ができた。
- 学校間掲示板を活用して理科に関する情報や教材・教具等の紹介をした。
- 日野の自然を「日野の生きもの」として、映像と資料をDVD5枚にまとめ、市内の幼・小・中学校に配布し、授業等で活用された。

2 今後の課題

先生方一人一人が、「魅力ある理科授業の展開」ができる姿を目指した、理科教育推進研究委員会の今後の主な課題は次のものである。

- 先生方の理科の指導力向上を図ることに重点を置き、研修内容の充実と参加者の増加に努める。
- 自然に恵まれた日野の自然を授業の中で活用できるよう授業実践を交えて教材化を進める。そのために、日野市内外の諸機関との連携を一層深め、「日野の生きもの」第二弾の、来年度の完成を目指す。
- 小・中教研との連携を一層深める。特に中学校への理科支援の充実に努める。
- 理科支援センターとしての活動を充実させる。
 - ・来年度も継続される科学技術振興機構の二つの事業（理科支援員等配置事業、CST事業）の推進
 - ・理科関係の情報の発信や教材の提供
 - ・日々の授業への助言や協力
 - ・理科実験室の設備等の充実
 - ・新しい理科の教科書に即した指導ができるよう、各校の理科室の教材・教具の充実、理科室の整備・運営に関する助言

理科教育推進研究委員会

委員長	千葉 正	日野第四中学校長
副委員長	五十嵐 俊子	平山小学校長
委員	馬場 武	学識経験者
委員	大澤 真人	CST 専属理科支援員
委員	大成 鐸夫	CST 専属理科支援員 日野第八小学校
委員	金井 誠	七生緑小学校副校長
委員	森本 友明	大坂上中学校副校長
委員	栗木 勇	CST 日野第四小学校主任教諭
委員	増田 由香里	CST, 旭が丘小学校教諭
委員	清水 智	CST(研修生) 滝合小学校教諭
指導主事	小林 邦子	日野市教育委員会学校課
運営担当	島崎 忠志	日野市立教育センター

3 ふるさと教育係

郷土教育推進研究

郷土教育推進研究委員会

I 研究主題

郷土意識を育む指導の在り方

～郷土の歴史、自然、文化、産業、人の教材化を通して～

II 研究主題設定の理由

本研究は、日野市の小・中学校、博物館、図書館、教育委員会、教育センターが連携して推進する7年目の継続研究である。教育基本法、学校教育法、学習指導要領が改正され、教育の目標に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」の文言が加えられた。本市の「教育基本構想」には、この考え方のもと、第2項に「日野市の自然・歴史・文化・産業等、郷土をより親しく学ぶために、郷土資料を編集し、地域の方々や専門家の協力を得た授業の推進」、第7項に「授業の質の向上を図るために、地域の教育資源を活用した授業の実施」が明記されている。郷土教育が、日野市の教育の最重要課題の一つとなっている。即ち、学校教育では、「郷土に誇りと愛着をもったひのっ子」「将来の日野を背負って立つ日野人」の育成が日野市の教育課題であり、市民からも大いに期待されているところである。そこで、本委員会では、日野の豊かな自然や歴史的文化的環境を活用した郷土教育を推進し、児童・生徒に日野のよさや特色に気付かせ、郷土を大切にすることの心情を育てることが大切であると考えた。そのため、郷土教育推進研究委員会では、郷土教材の発掘・教材化に努め、指導計画を作成し、授業を実践している。そして、この実践と成果を全市の小・中学校に普及・啓発するため、「郷土日野」指導事例集を作成し、市内全小・中学校、市立博物館・図書館等、関係機関へ配布している。

この趣旨を生かすため、今年度の研究主題を「郷土意識を育む指導の在り方～郷土の歴史、自然、文化、産業、人の教材化を通して～」と設定し、重点課題を3点に絞って推進研究と授業実践に当てることにした。

III 研究の目的

「ふるさと日野に誇りと愛着をもったひのっ子」「将来の日野を背負って立つ日野人」を育成するために、学校における郷土教育の在り方を研究する。この研究に基づき、各学校は郷土を活用した様々な教育活動を実践し、次のような児童・生徒を育成することが本研究の重要な目的である。

- 郷土の歴史、自然、文化、産業、人を理解し、先人への感謝の心をもった ひのっ子
- 郷土の特色やよさに気付き、継承・発展させたいと願い、行動する ひのっ子
- 郷土の一員としての自覚と誇りをもち、仲間や郷土の人々と協働できる ひのっ子
- 郷土の未来の姿を思い描き、よりよい郷土の実現について思考できる ひのっ子

IV 重点課題

今年度の重点課題を郷土教育の普及・啓発とし、具体的な課題3点を設定した。

- ① 郷土教育を推進する指導者（教員）の育成
- ② 図書館・博物館等，関係機関と連携した授業づくり
- ③ 郷土教材や実践事例の電子データ化

1 郷土教育を推進する指導者の育成

(1) 夏期郷土教育研修会(市教委共催)を実施し各小中学校の郷土教育推進リーダーを育成する。

- ・午前 高幡地区フィールドワーク
- ・午後 潤徳小学校で実践事例の発表・講義・演習

(2) 郷土教育推進研究委員が各学校・地域で郷土教育のリーダーとなる

- ・毎月の委員会で，実践報告・協議を重ね，研究を深める
- ・学識経験者，博物館学芸員，図書館司書から情報・資料の提供と指導・助言を受け，郷土教育の教材開発や実践に生かす。各委員が授業力の向上に努める。

2 博物館・図書館との連携

博物館・図書館が学校と関わる機能・役割として次の3点が考えられる。

- ①郷土に関する資料や情報が蓄積されている。
- ②蓄積された資料や情報をもとに小・中学校の授業を支援する。協働授業が実施できる。
- ③本市の博物館・図書館は，学校・市民に開かれた機関で，専門的見地から指導・助言・協働ができる。児童・生徒が興味・関心を高め，意欲的に学ぶことができる。

博物館・図書館と連携・協力することにより，効率的でより専門性を発揮した，児童・生徒をひきつける授業が実施できる。今後ますます博物館・図書館等関係機関と，よりよい連携協力関係を築き協働することが大切となってくる。

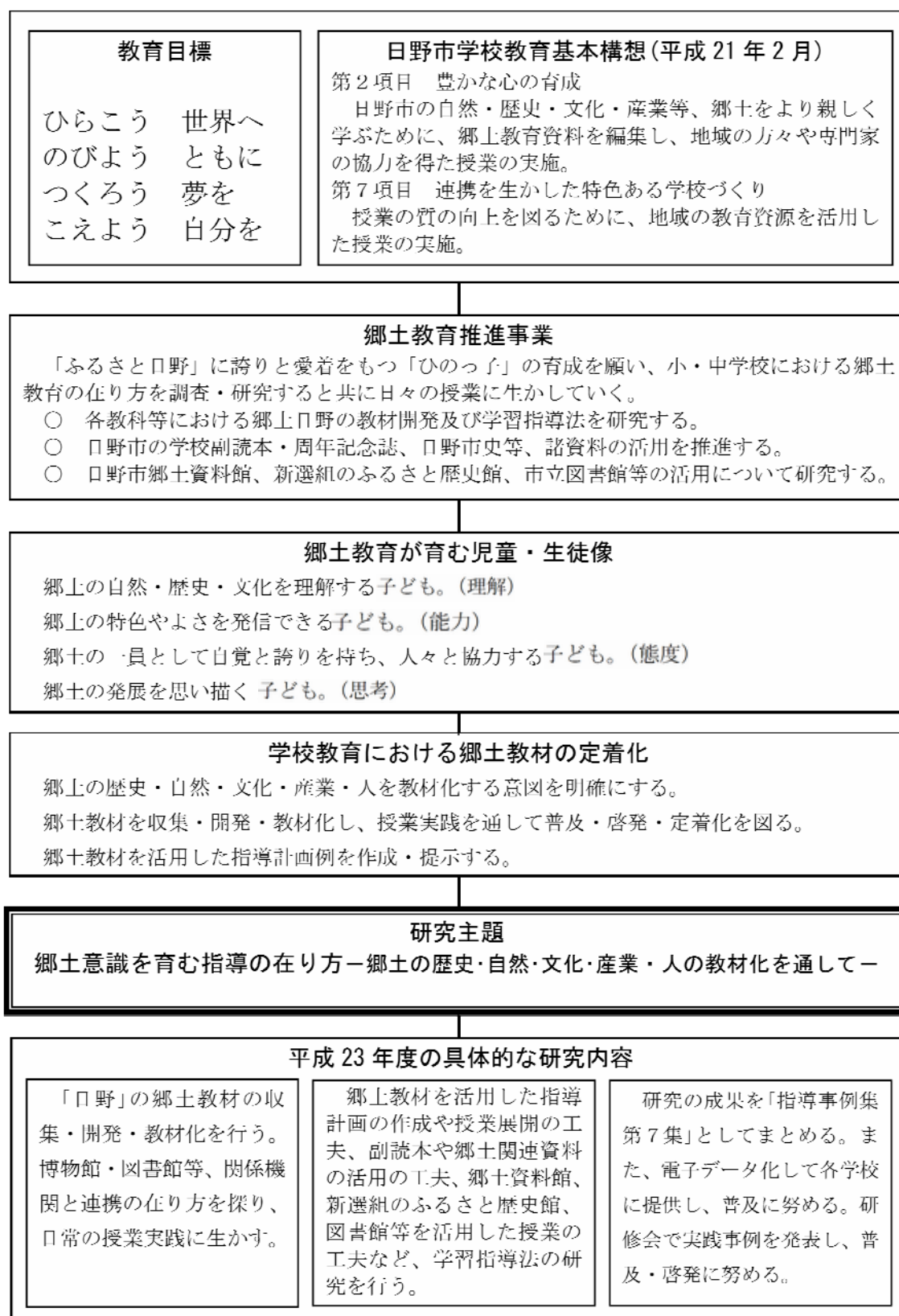
3 郷土教材の電子データ化 教育センターホームページの充実・整備（PDF化）

- (1) 郷土日野指導事例 第1集～第6集 全ページが閲覧できる。(図版がカラーで見られる)
- (2) 郷土日野画像図版資料集 第5集分が完成 写真や図表が，すぐ授業で使える。
- (3) 年間3回発行の「教育センターだより」にも，今年度から本委員会で発掘・教材化した事例を掲載することにした。

平成23年度		郷土教育推進研究委員会構成員名簿			
委員長	中 島 和 夫	日野第一小学校校長	副委員長	秋 田 克 己	日野第二小学校副校長
委 員	會 田 満	元校長・学識経験者	委 員	吉 野 美智子	元校長・学識経験者
委 員	馬 鳥 誠	日野第一小学校教諭	委 員	瀬 川 敦	日野第二小学校教諭
委 員	亀 田 貴 彦	日野第五小学校教諭	委 員	西 沢 庸	潤徳小学校教諭
委 員	荒 木 聖 男	旭が丘小学校教諭	委 員	永 江 悟 大	東光寺小学校教諭
委 員	森 田 誠 司	仲田小学校教諭	委 員	小 坂 克 信	七生緑小学校非常勤教員
委 員	金 野 啓 史	新選組のふるさと歴史館副主幹	委 員	白 川 未 来	郷土資料館学芸員
委 員	星 ま ゆ み	中央図書館司書	事務局 長	崎 将 幸	市教委学校課指導主事
事務局	小 杉 博 司	日野市立教育センター所員			

V 研究の内容

1 研究構想図



VI 日野の特色やよさを理解する指導者の育成

1 郷土教育夏期一日研修会（8月2日 9:00～16:45）

（1）研修会の主題

「高幡地区の歴史・自然を訪ねて～高幡不動と潤徳小学校～」

- ① 高幡地区を調査し、その教材化の視点を探る。
- ② 郷土資料の収集と活用，授業実践のありかたを学ぶ。
- ③ 博物館・図書館の活用方法と連携のありかたを学ぶ。

（2）高幡地区フィールドワーク（午前）

- ① 旧高幡駅と門前町（富士旅館，カフェ）
- ② 高幡山金剛寺
（殉節両雄の碑，玉南電気鉄道記念碑）
（高幡不動三尊，鳴り竜，旗かけの松）
（生まれ変わり伝説，藤蔵の墓）
- ③ 高幡城址（クロマツと松根油）
- ④ 旧潤徳小学校跡地（JA 東京みなみ七生支店）
- ⑤ 潤徳小学校発祥の地（旧医王寺跡，名主宅跡）
- ⑥ 程久保川と橋の名前
- ⑦ 藤治権現と滝瀬米店
- ⑧ 森久保作蔵の水車跡
- ⑨ 若宮愛宕神社と別旅伝説
- ⑩ 向島用水親水路（潤徳小ビオトープ）

（3）講義，発表，演習（午後，潤徳小学校）

- ① フィールドワークのまとめ（小坂）
- ② 潤徳国民学校の思い出（會田）
- ③ 実践事例発表
 - ・ 日野の果物「梨園見学会」（永江）
 - ・ 多摩平団地と多摩平の森（亀田）
 - ・ 仲田の森と蚕糸試験場（秋田，柳元）
- ④ 新聞記事で見る日野市の歩み50年（白川，小杉）
- ⑤ 日野市立図書館のあゆみ50年と
図書館・学校との連携（星）
- ⑥ 地形図を活用した教材化演習（小杉）

江戸時代の高幡不動。門前は田んぼで何も無い



松根油の採取跡



水車(向島用水)

2 郷土教材を活用した学習活動

（1）第2学年 生活「日野のにんじんづくり」

日野第一小学校 馬鳥 誠

＜1＞ ねらい

- ① 「にんじんづくり」の体験を通して，農家の苦労や工夫に気付く。
- ② 「地産地消」の野菜作り農家，「旬」の野菜を給食に活用する給食関係者の思いや願い，生き方に気付く。

＜2＞ 学習活動の工夫

- ① 日野市の農家の方をゲストティーチャーとして，「にんじんづくり」の方法を学び，「に

んじん」を栽培する。

② 市産業振興課やJA日野の方をゲストティーチャーとして招き「日野市の野菜作り」や「地産地消」について学ぶ。

③ 学校栄養士から「地産地消」の野菜を使った給食について学ぶ。

＜3＞ まとめ

① 「にんじん」栽培を続けることにより、様々な困難に出会い、多様な疑問を持つことができた。

② この疑問を農家の方に聞き、解決していく過程で、農家の方の苦労や工夫、思いや願い、生き方に気付くことができた。

③ 栽培した「にんじん」を給食に活用することにより、「旬」の野菜を食べることができ、幸せを感じ、給食関係者への「感謝」の心を持つことができた。



（2）第2学年 生活「ふしぎたんけん ふれあいたんけん」 仲田小学校 森田誠司

＜1＞ ねらい

① 自分たちの町を探検することにより、様々な古い物が残っていることに気付き、自分が生活している町に興味・関心をもつ。

② 昔から残っている文化財や施設を調べることにより、先人の努力・工夫、日野市のよさ・歴史に気付く。

＜2＞ 学習活動の工夫

① 仲田小学校の周囲にはどのような物があるか「紹介カード」に書き、紹介し合い、探検場所を決定する。

② 探検場所ごとのグループを編成し、保護者・地域の協力のもと探検を実施する。

③ 探検してわかったこと、思ったことを「あのねカード」に記入しグループで「町探検新聞」にまとめる。

＜3＞ まとめ

① 町探検を実施し自分たちの町の様々な歴史あるもの、人々と出会い、自分たちの町が古くから発展してきた町であることに気付いた。

② 自分たちの町の見聞を広め、町の歴史やよさに気付き、愛着を持つことができた。

③ 探検に地図を活用したり、探検場所を地図にまとめたりする地図の活用が課題である。



（3）3学年 社会「町の名前と日野市の地形」 日野第五小学校 亀田貴彦

＜1＞ ねらい

① 日野市の地名に興味・関心をもち、地名の由来を調べ日野市の地形の特色を理解する。

② 図書館と連携し、郷土資料を収集、教材化を図り、授業を推進する。

＜2＞ 学習活動の工夫

① 日野市の「日野」の由来について調べる。「のろし」→「飛火野」→「火野」→「日野」

② 地名に焦点を当て、日野市の地図を読む。 旭が丘 日野台 日野坂

③ 日野市の地図に地形や自然の特徴を表す地名を記入する。

・日野台 ・豊田 ・石田 ・南平 ・鹿島台 ・百草台

④ 地図を地形別に色分けする。 低地→黄 台地→緑 丘陵地→オレンジ

⑤ 完成した地図を見て、気付いたことを話し合う。

地名を調べると、地形、土地利用、歴史、人の思いや願い等がわかる。

〈3〉まとめ

① 資料収集が課題である。

「日野市史」 図書館の「郷土資料コーナー」「小中学校の周年記念誌」が役に立った。

② 地名を調べるにより
地形・自然・歴史、さらに地



域の人々の思いや願いがわかり、郷土日野への興味・関心・愛着が深まった。

（４）第１学年 国語「東光寺の昔話～神明様のおつげ～」 東光寺小学校 永江悟大

〈1〉ねらい

① 地域の昔話を讀んだり聞いたりして、地域に伝承されている昔話に興味・関心をもつ。

② 地域の昔話を紙芝居に表現し、語り部となって発表し合う。

〈2〉学習活動の工夫

① 語り部から全国各地の昔話を聞く。

② 児童自ら語り部となり東光寺の昔話を語り、聞き合う。

③ 「親と子の共同作業」で、紙芝居づくりは親、語りは子と、親子で分担・共同して授業を進める。家庭学習を取り入れ親子で音読練習する。

〈3〉まとめ

① 全国、地域の昔話・神話・伝承に興味・関心を持ち、もっと調べたい、知りたいと意欲をもつことができた。

② 語り部の語りに興味・関心を持ち、昔話や神



話・伝承の雰囲気を出した表現を工夫し、発表することができた。

③ 地域「東光寺」のよさに気付き、親子で地域のことをもっと知りたいという追究意欲が高まった。

（５）第３学年社会「昔の暮らし～日野の昔話を通して昔の暮らしの道具や様子を理解する～」

日野第二小学校 瀬川 敦

〈1〉ねらい

① 日野市内に伝承されている昔話を讀み、様々な昔の生活用具に気付き、日野の昔の様子を理解する。

② 昔から残っている文化財や町の様子を調べるにより、先人の努力・工夫、日野の

昔、日野市のよさに気付く。

＜2＞ 学習活動の工夫

① 日野の昔の様子がわかる昔話を読み、地域の昔に興味・関心をもつ。（教師は3年生の児童が理解できるように昔話を再構成する）

② 昔話の内容が具体的でよくわかるように昔話を紙芝居にし、昔の生活用具や生活の様子に気付き調べる。（電子黒板の活用）

③ 郷土資料館から、昔の生活用具や道具を借り、実物を見てその使い方や昔の生活の様子を考える。

＜3＞ まとめ

① 日野に鉄道が開通したころの町の様子がわかった。

② 日野の町は養蚕が盛んであったことがわかった。

③ 昔の日野は雑木林がたくさんあり、人々の生活に活用されていたことがわかった。

④ 昔話を活用することにより、昔の日野の生活の様子がよくわかった。児童は、興味・関心を持続させ、「日野の昔の暮らし」を追究することができた。また「ふるさと日野」に対する誇りと愛着心を高めることができた。



（6）第4学年 総合「雑木林に親しもう～炭焼き体験～」 旭が丘小学校 荒木聖男

＜1＞ ねらい

① 学校林を活用し炭焼き体験を行い、昔の日野の人々の努力や工夫に気付き、昔の生活の様子を考える。

② 炭焼き体験を通して「萌芽更新」等、雑木林についての理解を深め、雑木林を維持してきた先人の努力・工夫に気付く。

③ 雑木林が残る日野のよさに気付き、今後さらに雑木林を保存・活用・継承していこうとする気持ちを持つ。

＜2＞ 学習活動の工夫

① 1学期末に学校林で剪定したクヌギの枝を活用し、炭焼きをすることを知り雑木林への興味・関心を高め、炭焼きの手順を学ぶ。

② 空き缶を活用した方法で、クヌギの枝を蒸し焼きにし炭を作る。

③ 七輪と電子レンジで「もち」を焼き、味比べをする。

④ 雑木林の「萌芽更新」について学ぶ。

⑤ 雑木林が残る旭が丘地区の土地利用を観察する。



＜3＞ まとめ

① 炭焼き体験を通して昔の人々の生活の様子を理解することができた。

② 雑木林の保存・活用・継承の重要性に気付くことができた。

③ 雑木林のある学校「旭が丘小学校」に誇りと愛着を持つことができた。

(7) 第5学年 総合「お米プロジェクト～地域との交流を通して～」 潤徳小学校 西沢 庸

〈1〉ねらい

- ① 保護者・地域の総力をあげての支援・協力のもと、1年間を通して米作りに取り組み、米作りの苦労・工夫・人々の協力を気付く。
- ② 地域との交流を通して米作りを体験し、かつて「多摩の米蔵」と呼ばれた日野の特色を理解し、また、潤徳小学校に対する地域の人々の熱い思いに気付く。

〈2〉学習活動の工夫

- ① 4月 JA 東京南の職員を講師に招き、1年間の米作りの作業、苦労・工夫についてのお話を聞く。
- ② 5月 日野市環境情報センターの指導のもと、種もみを苗床へまく体験をする。水田の雑草とりを行う。
- ③ 6月 日野市環境情報センター、JA 東京南、日野市緑と清流課、保護者の方々の指導・協力のもと田植を行う。
- ④ 7～9月 定期的に草取りを行う。図書館やインターネットを活用し、米作りについて調べる。水田に網掛けを行う。
- ⑤ 10月 案山子づくりを行う。(テーマはハロウィン)
- ⑥ 11月 案山子を日野市産業まっりの案山子コンテストに出品する。稲刈りを行う。はざかけを行う。脱穀し収穫する。
- ⑦ 12月 地主さんの好意で「もち米」40kgいただく。もち米の活用について話し合う。高幡不動商店街からアドバイスをいただく。
- ⑧ 1～2月 洋菓子屋の協力で米粉から「マドレーヌ」を作る。「マドレーヌ」は福島県いわき市の被災した5年生と家族・学校に贈る。洋菓子屋さんの好意で期間限定店頭販売を行う。

〈まとめ〉

- ① 米作りの1年間を通じた苦労・工夫について理解することができた。
- ② 様々な地域の方々と交流し、人との関わり大切さに気付くことができた。
- ③ 地域との交流・関わりを通して、潤徳小学校、高幡の町を誇りに思い愛着心を持つようになった。
- ④ 本実践を来年度以降も継続・発展させ、定着を図ることが課題である。



VII 博物館・図書館との連携

1 博物館との連携 市民の力～郷土教育推進に向けた体制づくり～

(1) 日野市の郷土学習施設とこれまでの取り組み

- ① 郷土資料館、生涯学習課文化財係
学校の見学への対応、出張講座、出張授業、郷土資料の貸出し
- ② 新選組のふるさと歴史館
主に幕末維新、甲州道中日野宿に関する学校の見学、調べ学習に対応

- ③ 市立図書館 図書の閲覧・貸し出し，レファレンス

(2) 郷土学習施設を支える市民の力

① 市民ボランティア

日野市50年の歩みを調査する会，勝五郎調査団，七生丘陵調査団，雑木林探検隊

② 市民団体

古文書を読む会，日野市の昭和史を綴る会，石仏の会，日野の自然を守る会

(3) 行政内部の連携

郷土学習施設相互の連携や情報の共有化，日野市全体が学校を支援する体制づくり
産業振興課，道路課，緑と清流課

(4) 七生丘陵を題材とした郷土学習

① 七生丘陵のあゆみ

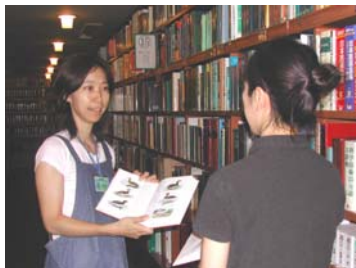
- ・大正14年 玉南鉄道の開通と七生村の変化，七生村と京王電鉄の協力による観光開発 高幡不動尊門前町，百草園，七生丘陵ハイキングコース，平山ゴルフ場，鮫陵源
- ・戦後 多摩動物公園，多摩テック，平山城址公園，宅地開発

② 関係機関の協力

- ・市民，企業，京王線，日野の自然を守る会，七生丘陵調査団，日野の昭和史を綴る会，古文書を読む会
- ・市 緑と清流課，環境情報センター，まちづくり課，産業振興課

(5) これからの郷土教育推進に向けて

- ① 郷土学習施設のみならず，日野市全体が「よってたかって」こどもたちの郷土学習を支援する体制作りが課題である。
- ② 郷土を理解し，郷土を愛する心を育むこと，さらに物事を関連づけながら日本や世界全体を見通す目を育てることが大切である。



2 図書館との連携 日野市立図書館のあゆみ50年と郷土教育との連携

(1) 日野市立図書館のあゆみ

- ・有山 崧（元日本図書館協議会事務局長，日野市長）と前川恒雄（日野市立図書館初代館長）の連携・尽力
- ・昭和40年 1台の移動図書館車「ひまわり号」でサービス開始
- ・昭和41年 2台の移動図書館車でサービス
- ・昭和41年 多摩平児童図書館開館（廃車となった都電利用）
高幡図書館開館（七生支所2階）
- ・昭和42年 社会福祉センター図書館開館
- ・昭和44年 社会教育センター図書館開館
- ・昭和46年 平山図書館開館
- ・昭和47年 百草台児童図書館開館
- ・昭和48年 中央図書館開館（豊田）
- ・昭和50年 利用率日本一（年間1人7.4冊）



- ・昭和 52 年 市政図書室開設（市役所）
- ・昭和 55 年 高幡図書館移転新築 日野図書館移転改装
- ・平成 2 年 百草図書館開館
- ・平成 16 年 多摩平図書館リニューアル（多摩平の森ふれあい館）
- ・平成 20 年 平山図書館リニューアル（平山季重ふれあい館）移動図書館「新ひまわり号」1 台



（２）図書館と郷土教育の連携

① 日野市図書館基本計画（平成 20 年）

- ・図書館の任務 日野市の地域資料・行政資料を収集・保存・提供し、日野市の歴史を未来に伝える。

② レファレンスサービス ・小中学生の調べ学習のお手伝いをする。（資料・情報提供）

③ 第 2 次日野市子ども読書活動推進計画

- ・学校との連携 「郷土日野」指導事例集の活用，市政図書室・中央図書館市民資料室の活用，日野市に関する資料の永久保存
- ・今後の課題・・・子ども向け地域資料の作成

VIII まとめ 成果と課題

1 成 果 学習指導法の研究及び指導者の育成について，以下の 3 点が達成できた。

- ① 指導事例集の発行 「郷土日野」指導事例 第 7 集
- ② 郷土教育夏期全日研修会で高幡地区のフィールドワークを実施し，教材化の方法，開発教材の紹介，博物館・図書館等の活用方法，課題設定の方法の演習等，研修を実施
- ③ 郷土教材等の電子化
教育センターのホームページへ掲載（指導事例集，写真教材）
過去のプレゼンテーションデータを全委員が共有し活用

本委員会の若手教員が 1 年間の研究・実践を通して，日野の特色・よさに気づき，郷土の教材化・授業の楽しさを味わうことができた。実践途上，苦しさも体験したが，本委員会のチームワークのもと，子ども，保護者，地域と共に授業を創り上げることができた。在籍校での授業は自信に満ち溢れ，郷土教育リーダーとして成長している。

また，本市校長会に郷土教育の重要性を理解していただき，「郷土教育は校長のリーダーシップから」と，児童朝会等の校長講話で積極的に郷土教材を取り上げていただいた。『平成 23 年度「郷土日野」指導事例 第 7 集』には，9 本の校長講話を掲載することができた。

2 課 題

第 1 の課題は，研究推進・授業実践の成果を継承・発展・定着させることである。そのためには学校現場に成果を普及・啓発させることが重要である。

第 2 の課題は，郷土教育推進リーダーの育成である。若手教員の郷土教育推進リーダーが育ちつつあるが，教員間の郷土認識の差が大きい。ひのっ子だけではなく，教員も「日野をふるさと」と思い，日野に誇りと愛着をもった教員」「日野の教育を背負って立つ気概をもった教員」へと意識を高めてほしい。

第 3 の課題は，さらに，日野の特色やよさが理解できるフィールドワークや授業づくりの研修会を充実させることである。

4 基礎調査研究係

ひのっ子教育 2 1 開発委員会の研究

I ひのっ子教育 2 1 開発委員会の研究

ひのっ子教育 2 1 開発委員会の研究事業実施要綱によると、その目的は、「日野市における学校教育の振興を図る。」とある。また組織運営の規定では、「事務局は、教育委員会指導主事および日野市教育センター職員から構成する」とある。教育センター基礎調査研究係は、日野市教育委員会の事業である本委員会の事務局構成員として協力・支援してきた。

II 本年度開発委員会の研究の目的

平成 2 3 年度の新学習指導要領の施行により、新しい教育課程が実施された。新しい指導要領には、子どもたちの発達段階を考慮して言語活動を充実させることが記されている。日野市では、日野市学校教育基本構想の中で、子どもたちに自らの考えをまとめ発表する力を育てることをねらいとするなどコミュニケーション能力の育成に力を入れた学校教育を推進している。新学習指導要領では、小学校において新たに「外国語活動」が導入された。その目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う」としている。5、6 学年において、年間 3 5 時間を指導する。日野市教育委員会では、「外国語活動」導入に当たり、異文化を理解するために相互に気持ちを通い合わせ、適切な人間関係を築くことのできるコミュニケーション能力を高め、豊かに伝い合う子どもたちを育てることに力を入れている。

そこで、ひのっ子教育 2 1 開発委員会では、平成 2 2 年、2 3 年度の 2 年間、「小学校外国語活動と中学校外国語の円滑な接続」をテーマに研究を進めてきた。小・中連携の視点を踏まえ、コミュニケーション教育としての外国語のねらいを明確にして、授業展開に役立つ知識やスキルの向上を図り、指導方法のあり方を研究してきた。今年度の研究では、小学校外国語活動から中学校外国語（英語）を見通した指導の連続性を明らかにした指導計画、アクティビティ、指導方法、評価、教材・教具の工夫を視点として研究を進めた。さらに、クラスルームイングリッシュの使用、振り替りカードの開発、ALT と連携した指導体制の充実、ICT 機器などの有効活用など発達段階に即した教材・教具の選択などを追求してきた。

III 研究の組織と経過

1 研究の組織

(1) 担当指導講師 上智大学外国語学部英語学科准教授 和泉 伸一教授

(2) 研究推進組織

- ・市立小・中学校 2 5 校を 4 ブロックに分け、中学校を中心とした小・中学校の組み合わせとする。
- ・研究の推進は、ブロックリーダー（中学校）、サブリーダー（小学校）を中心としたグループワークとして進める。
- ・ブロックごとの研究授業・協議会には、ブロック内の学校は参加を原則とする。

2 研究の経過

- 4月25日（月） 全体会（講義「小・中連携の取組の充実を」）、分科会
- 5月31日（火） Bブロック提案 実践授業・研究協議会、指導講評 和泉先生
ブロックテーマ「小・中の円滑な接続を図る外国語活動（英語）の授業作り、指導方法の工夫」研究授業 日野第三中学校1年生 授業者 青柳玲子主幹教諭
- 6月23日（木） 全体会、分科会（7月のM.T.の模範授業に向けたグループ討議）
- 7月 7日（木） M.T.模範授業（授業10分→解説5分→質疑応答5分）
指導講評 上智大学外国語学部准教授 和泉伸一先生
- 9月20日（火） Cブロック提案 実践授業・研究協議会、指導講評 和泉先生
ブロックテーマ「小・中の円滑な接続を図る指導計画、アクティビティの工夫」
研究授業 平山中学校3年生 授業者 大川京子教諭
- 10月13日（木） Aブロック提案 実践授業・研究協議会、指導講評 和泉先生
ブロックテーマ 「小学校外国語活動の評価について」
研究授業 日野第一小学校5年生 授業者 見米葉記教諭
- 11月10日（木） Dブロック提案 実践授業・研究協議会、指導講評 和泉先生
ブロックテーマ 「小学校外国語活動の教材・教具の工夫」
研究授業 旭が丘小学校第5学年 授業者 宮山雅子教諭
- 12月 8日（木） 全体会 ひのっ子教育21開発委員会発表会に向けて
分科会 報告者作成、発表会準備
- 1月19日（木） 全体会 発表会の役割分担と打ち合わせ
分科会 発表会に向けて
- 2月16日（木） **ひのっ子教育21開発委員会発表会 日野第一中学校食堂**
講演・ワークショップ「内容言語統合型学習のすすめ」
講師 上智大学外国語学部 准教授 和泉 伸一 先生
上智大学大学院生 山野 有紀 先生

3 研究発表と実践事例の公開

（1）研究発表

2月16日に日野第一中学校で研究発表を行う。

（2）実践事例集の作成と公開

ひのっ子開発委員がそれぞれ作成した実践事例指導案をもとに、「外国語活動・英語科指導実践事例集」を作成し配布する。



IV 報告書について

今年度は小学校外国語活動から中学校を見通した指導の連続性を明らかにした4つの視点から研究を進め、2月16日の発表会に報告書（実践事例集）として配布し、その内容を報告した。

1 小学校外国語活動のねらいとポイント

(1) 外国語活動の目標と内容

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。 (小学校学習指導要領外国語活動の目標)

コミュニケーション能力の素地を養う

①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める

つながる

②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る

支える

③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に親しませる

●児童の興味・関心に合った指導内容や活動の工夫

●他教科で学習したことを活用した指導計画の作成

●ALTの活用

●ICT（視聴覚教材、デジタル教科書）の活用

小学校の外国語活動においては、知識やスキルの定着を目指す活動というより、体験的な活動を通して、コミュニケーションそのものの大切さに触れることが重視されている。

コミュニケーション活動を充実させるためには、その前提としてチャンツやキーワードゲームなど英語に慣れ親しむための活動が必要になる。授業や単元の中で、様々な活動を考える際には、この「慣れ親しみの活動」と「コミュニケーション活動」の性質を意識して構成することが大切である。

インプット・
アウトプット
型の活動

慣れ親しみの活動
(インプットの活動)

チャンツ、キーワードゲームなど
英語表現に慣れ親しむ活動

コミュニケーション活動
(アウトプットの活動)

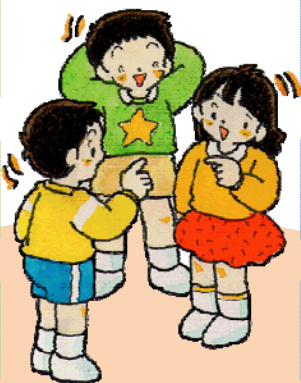
外国語の表現を使って相手と情報を
やり取りする伝え合いの活動

言語や文化を体験的に理解する

外国語の音声やリズムに慣れ親しむこと、日本語との違い、言葉の面白さや豊かさ気付くこと

日本と外国の生活、習慣、行事などの違い、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと

異なる文化をもつ人々との交流、文化等に対する理解を深めること



コミュニケーションを図る

外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること

積極的に外国語を聞いたり、話したりすること

言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること

(2) 外国語活動のポイント

① 外国語活動における慣れ親しみの活動やコミュニケーション活動を工夫する。

体験的な理解を図るコミュニケーション活動を行う

… 外国語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達段階を考慮した表現を用い、児童にとって身近なコミュニケーションの場面を設定する。

聞くこと・話すことを中心とした豊かなコミュニケーションを体験させる

… 音声によるコミュニケーションを重視する。コミュニケーションの場面に応じた表現を、実際の体験の中で気付かせる。

ジェスチャーや表情などのコミュニケーションの手段を用いる

… 言葉によらないコミュニケーションの役割を理解させる。

授業の中にコミュニケーションの場面を設定する

… 「よく使われる表現」や「身近な暮らしにかかわる場面」などのコミュニケーションの場面を取り上げる。

授業の中にコミュニケーションの働きを設定する

… 「相手との関係を円滑にする」、「気持ちを伝える」、「考えや意図を伝える」、「相手の行動を促す」といったコミュニケーションの働きを取り上げる。

② 担任だからこそできる外国語活動を工夫する。

安心して話せる雰囲気（日頃の学級集団作り、学級経営）

英語の環境を整える（体験、目から、耳から）

インプットの時間を保障する（歌やチャンツなどの音声）

伝える力を鍛える（ジェスチャー、表情、言い換えなど）

他教科等で学習したことを深める、確かめる

コミュニケーション能力の
素地を養うための工夫

2 なぜ、小・中連携が必要なのか？

◎小学校外国語活動と中学校外国語のねらいの違いを理解する。

◆小学校外国語活動

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

目標の3つの柱

・外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める

・外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る

・外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる

コミュニケーション能力の素地を養う

小学校：「素地」を養う

中学校：「基礎」を養う

◆中学校外国語

外国語を通じて、言語や文化について理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。

目標の3つの柱

・外国語を通じて、言語や文化について理解を深める

・外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る

・外国語を通じて、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う

コミュニケーション能力の基礎を養う

小学校外国語活動では、聞くこと・話すことを中心としたコミュニケーション活動を通して、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの場面や働きについて、体験的な理解を図ることをねらいとしている。小学校では、外国語に触れたり、体験したりする機会を提供することにより、中学校・高等学校においてコミュニケーション能力を育成するための素地を作ることが求められている。

小学校外国語活動で養ったコミュニケーション能力の素地の上に、中学校では、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーションの基礎を養うのである。つまり、より具体的な言語材料と技能の習得・定着を図るという点で異なっている。

◎小学校と小学校、小学校と中学校の教師の指導法の違いを埋める。

小学校間で外国語活動の内容などにばらつきがある！



実際には、小学校段階の外国語活動において、各学校で指導内容や方法などにばらつきが見られる。そのため、中学校に進学した時点で、子供たちの基礎・基本に違いがあり、同じスタートラインに立っていない現状がある。

小学校と中学校で、お互いの授業内容が分からない！



中学校では従来から教科として外国語（英語）を指導してきたが、現状では小学校の外国語活動との接続や連携を考慮しながら進めているとは言えない。小学校教員も、中学校ではどんな授業をしているのか分からない。

小学校外国語活動を充実させるとともに、小学校教員同士や、小・中学校教員の交流を密にし、お互いの授業を観る機会をもつ。また、小・中学校それぞれの教師が相互の指導内容を理解し、中学校との円滑な接続を考慮に入れた指導を工夫していく必要がある。

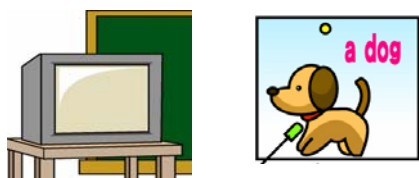
◎優れた実践や教材・教具を開発し、共有する。

外国語活動の指導に自信がない！
ALT との連携を効果的にしたい！



児童・生徒の発達段階を踏まえ、コミュニケーションに対する積極的な態度を育成するために、学級担任の特性を活かすことが重要であるが、外国語活動の授業の「計画・実施・評価」の在り方を工夫した授業作りとはどんなものか。

どんな教材を使ったらよいのか？
ICT を効果的に活用したい！



コミュニケーションを充実させるために、アクティビティの工夫、歌やチャンツの利用、ゲームの効果的な活用など、どんな指導内容・方法や教材が効果的なのか知りたい。また、授業や学校間の連携でも、ICT を有効に活用したい。

英語ノートや教材集などには、様々なアクティビティやゲームなどある。しかし、授業のねらいに合った適切なものを選択していないと、楽しさだけを求めたり、競争に終始してしまったりする。目的を明確にすること、使用表現を吟味することなどに気を付けて、授業作りを進める。その際に、優れた実践や教材・教具などを紹介し合い、共有できるような場をもつことが重要である。

3 ひのっ子教育 2 1 開発委員会の研究（研究の概要）

- ① 小学校外国語活動と中学校外国語の円滑な接続という視点で、小学校・中学校の交流（教師及び児童・生徒）の機会を継続的なものにする。

小学校・中学校の教師間で情報交換・意見交流する



- ◇ 市内小・中学校25校を地域ごとに4ブロックに分ける。
- ◇ 定例会及びブロック会で情報交換，意見交流を進める。
- ◇ 中学校英語科教員がリーダー役を務め，進行・助言する。
- ◇ 学習指導案や教材作成について協議する。
- ◇ 各校の実践に基づいた活動や教材について検討する。

模擬授業（マイクロティーチング）で学び合う



- ◇ マイクロティーチングとは…
実際の授業を模した形の模擬授業である。授業をいくつかのセクションに分け，その中の一つを取り出して，相互評価による学び合いを行う。
- ◇ 指導案作成→教材準備→授業の練習をする。
- ◇ ブロックごとに模擬授業を発表，協議する。
（授業10分・解説5分・質疑応答5分）

出前授業やT.Tとして他校の授業に関わる



- ◇ 中学校英語科教員による小学校への出前授業を行う。
- ◇ 小・中学校教員がそれぞれT.Tとして授業協力する。
- ◇ 小・中での共通した英語表現であるクラスルーム・イングリッシュを使用する。
- ◇ お互いの役割分担や活動の時間配分，教材・教具の取り扱いなどを相談しておく。



外国語活動と外国語をベースにした交流や研究を通して，小学校と中学校のそれぞれの教員が考えを出し合い，互いの指導内容や方法を理解し合うことが，よりよい授業の創造へとつながる。

- ② 小・中連携の視点を明確にした授業作りについて研究する。
(指導計画・アクティビティ、指導方法、評価、教材・教具の工夫など)

小・中連携を視点に授業作りを進める



- ◇ 外国語活動（外国語）の目標に合った活動を工夫する。
→ コミュニケーション能力の素地（基礎）を養う活動にふさわしいものである。児童にどんな力を付けたいのかが明確である。
- ◇ 児童・生徒の実態に合った題材・活動を選択する。
→ 児童の発達段階や興味・生活、学習経験にふさわしいものである。
- ◇ 小・中学校の接続を意識した指導を展開する。
→ 小・中学校で共通した英語表現であるクラスルーム・イングリッシュを使用する。指導内容の関連と系統性を考慮に入れる。

アクティビティや指導方法、教材・教具を工夫する

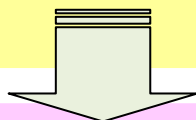


- ◇ 小・中連携を視点にした指導計画・アクティビティ、指導方法、評価、教材・教具を工夫する。
- ◇ アクティビティ、チャンツ、歌、ゲームなどに効果的に活用できる教材・教具を用いる。
 - ① めあてカード：活動のめあてを黒板に貼る。
 - ② ピクチャーカード：絵・イラストと音声を結び付ける。
 - ③ 絵本：大判の絵本を用いて英語表現に親しませる。
 - ④ ペープサート、名札：ロールプレイを工夫する。

授業や連携のために ICT を活用する



- ◇ 52インチ電子黒板、CD、DVD、楽器などを活用して視覚的效果を活かし、音声表現に慣れ親しませる。
- ④ 導入段階や場面設定のために、写真やイラスト、映像などの資料を提示する。
- ⑤ デジタル教科書やモニター画面のスライド表示で、フラッシュカードの役割をする。
- ⑥ ICT を活用して、教材・教具等を校内、校外で共有する。



小・中連携の視点で授業作りを進めることで、それぞれのねらいを明確にして、小学校と中学校の接続を滑らかにする指導内容や指導方法を工夫する。授業の質を高めるとともに、中一ギャップ解消にもつながると考える。

4 ブロックテーマと実践事例（外国語活動の授業作り）について

◎ブロックテーマについて

ブ ロ ッ ク テ ー マ

① 指導計画・アクティビティ

小・中学校の学習内容を見通した指導計画を提案し、系統性を意識した授業作りを進める。



② 授業作り，指導方法

小・中学校の指導の継続性を大切にしたクラスルームイングリッシュの使用，T.Tの在り方などについて工夫する。

③ 評価

外国語活動と外国語における評価の考え方を示し，授業中の評価の方法について提案する。



④ 教材・教具

コミュニケーションに対する意欲的な姿勢を育てるための教材・教具の工夫やICTの活用について紹介する。



小学校外国語活動と中学校外国語の円滑な接続を図る指導を工夫する

◎実践事例（外国語活動の授業作り）について

① 挨拶・ウォーミングアップ Greeting, Warm-up

② 課題の提示・使用表現の導入 Theme, Practice

(例) いろいろな国名を知る。(食べ物の名前)
Japan, America, France, Korea, …

③ 慣れ親しみの活動・アクティビティ 1 Activity

(例) Collecting Cards game
(使用表現 I get ～.)

④ 慣れ親しみの活動・アクティビティ 2 Activity

(例) Message game
(グループで列になって国名を伝える。)

⑤ コミュニケーション活動 Communication

(例) 外国についてたずねてみよう

⑥ まとめ・振り返り，挨拶 Summary, Greeting

どのような資質・能力を培うのかによって、児童に意図的な支援を行う。

◎挨拶・ウォーミングアップの活動を通して、外国語活動にスムーズに入っていけるようにする。

◎活動の場面やねらいを明確にして、活動を進める。
◎本時で使用する表現やリズムに慣れ親しむ。

◎本時で使用する表現やリズムをインプットする時間を保障する。
◎ALT や CD などを用いて、イントネーションやリズムに慣れるようにする。

◎ねらいにあった活動を工夫する。
◎自己表現のできるコミュニケーション活動などを取り入れる。

◎外国の言葉や習慣などに興味をもたせ、次時への意欲を高める。

◎教師が評価の視点を明確にもつこと、児童による自己評価を工夫することなど、適切な評価を行う。

V 成果と課題

<成 果> 小・中連携の取組と外国語活動、外国語の指導への理解が深まった

小学校と中学校の指導の接続や教員同士の連携の日常化

- ・ 中学校の授業で小学校外国語活動の既習事項を活用できるようになり、子供が興味・関心をもって授業に臨むことができるようになった。
- ・ 授業実践を通し、校種間の指導内容や指導方法の共通理解が深まるとともに教材やアクティビティの共有化ができ、小・中の円滑な連携が一段と進んだ。

外国語活動、外国語における教材の開発と共有

- ・ 授業で活用できる教材、教具をブロック内の研究会で交換したり、開発したりして、指導効果を高める工夫を行うことができた。
- ・ I C Tを活用し、Z! Stream（市内共有）などのデジタル教科書やパワーポイントなどを使った授業が小・中学校で共通してできるようになり効果を上げている。

外国語活動、外国語の指導に関する考え方の深まり

- ・ 上智大学外国語学部英語学科准教授 授和泉伸一先生の熱心な指導により実践に即した理解が進んだ。特に、小・中連携を意識した外国語活動の授業作りと指導計画、指導方法の工夫、学習過程におけるアクティビティや教材・教具の工夫、評価について、実際の授業にすぐ使える実践例を工夫することができた。

外国語活動・外国語指導の先進的実践教員の育成

- ・ 日野市内の小学校、中学校から各1名、ひのつ子教育21開発委員として2年間研究活動を行うことができ、小・中の円滑な接続を意識した外国語活動、外国語の指導の中心となる教員を育成することができた。今後は、各校のカリキュラム作成・改善や指導の在り方に力を発揮できる人材となる。

<課 題> 子どもたちの豊かなコミュニケーションを図る活動を充実させる

小・中の接続を踏まえた外国語活動、外国語を広めていくために

- ・ 指導計画、アクティビティ、指導方法、教材・教具、評価の工夫などを小学校、中学校が共有できる場を工夫し、日野市の教員のスキルアップにつなげていくことが重要となる。今後、I C Tを活用し「外国語活動・外国語」の市内共有フォルダに情報を集め、日野市内の学校間で共有して、誰でも使えるようにしていく。

児童・生徒の言語環境を整え、豊かなコミュニケーションを図る

- ・ 音声言語の獲得は「聞くこと」から始まる。子供たちの豊かな言語環境を整え、英語に慣れ親しませたり、コミュニケーションを積極的に図る活動を取り入れたりすることが大切である。そのためには、私たち大人の自己研鑽とともに、教師として魅力ある授業作りに励むことが必要である。

一年間「ひのっ子教育21開発委員会」に携わって

上智大学 和泉 伸一

2011年春から小学校外国語活動が全国で正式導入された。そして、2012年春からは、小学校で新学習指導要領のもとで外国語活動を体験してきた生徒たちが全国の中学校に入学する。小学校の「外国語活動」から中学校での「教科」としての英語に触れる子どもたちをどのように教え、支援していったらよいのか。各地で様々な試行錯誤が繰り返されているが、英語をコミュニケーションとして捉えて教えていこうとする姿勢は小・中学校とも変わりはない点を忘れてはならないだろう。

昨今、小・中学校の教員間の連携の必要性が叫ばれている中で、日野市が「小学校外国語活動と中学校外国語の円滑な接続」というテーマのもと、小・中学校の教員チームを作って積極的に研修・研鑽に励んできたことは、時期を得た大事な取組である。子どもたちよりもまず教師自らが率先して豊かなコミュニケーションをする姿を示していく好例と言えよう。

これまでも全国各地で小・中・高・大学での様々な教員研修や講演などに携わってきたが、面白いことに、小学校での英語活動の中で中・高ではあまり見られないような様々な工夫が積極的になされていることが多く見られる。そのような授業に触発され、児童が旺盛な興味や好奇心を示して、それに対して教師が一生懸命に応えようとしている姿を見ることも珍しくない。小学校の教員が英語教育のプロである中・高の英語教員から学ぶことも多いだろうが、逆に中・高の教員が小学校の教員のエネルギーや創造力、また教育に対する熱い思いなどから学ぶことも決して少なくないだろう。お互いに謙虚に学び合おうとする気持ちがかみ合うところに、我々が目指すべき本当のコミュニケーションが生まれてくるように思われてならない。この一年間、「ひのっ

子教育21開発委員会」で小・中学校の先生方が日々の多忙なスケジュールのもと、何度となく会い、研究授業、分科会、全体会、研修会と多くの時間を共にしてきたことは、それ自体とても素晴らしいことであり、未来を先取っていく”breakthrough”（進展・脱皮）であると確信している。

外国語学習というと、単語をいくつか覚えただかとか、挨拶や自己紹介がペラペラにできるようになったかといったように、とかく目に見える成果を焦って追い求めてしまう傾向がある。しかし、外国語学習は何年も時間をかけて成すものであり、長期的な視野で見なければならぬ。グローバル化した社会の中で求められるのは、単なる知識や技能としての語学力ではなく、多様な価値観をもつ人々と偏見なく意思疎通を図りながら豊かな人間関係を築いていく能力である。そのような力を育成するための外国語教育である。そのために、小・中学校とも内容の豊かなインプット、インタラクションのあふれる授業作りが重要となるのである。とりわけ小学校外国語活動では、外国語と世界を見つめる上で必要となる豊かな情意面（外国（語）への興味、関心、態度）を育成することが重要となる。そのような「素地」を小学校でどのように育て、中学校でそれをどう受け止め、どのように発展させていくのか。その答えは、実践への飽くなき挑戦からしか生まれないだろう。

今回の日野市の取組は、このような大いなる挑戦に真っ正面から立ち向かおうとする重要な試みである。そのような試みに、外部から突然お邪魔する形でこの一年間、小・中学校の先生方と研修を共にすることができたことに対して、ここに改めて心から感謝申し上げたい。日野市の今後の更なるbreakthroughを心より願っている。

【平成23年度 ひのっ子教育21開発委員会】

指導講師 上智大学外国語学部英語学科准教授 和泉 伸一 先生

開発委員

委員長	滝合小学校	校長	岡部 君夫
委員長	日野第三中学校	校長	石村 康代
副委員長	東光寺小学校	副校長	内海 将行
副委員長	日野第一中学校	副校長	高橋 清吾

各校委員 (◎リーダー ○サブリーダー)

Aブロック委員

◎大坂上中学校	教諭	小中原 愛	日野第一小学校	教諭	見米 葉記
○日野第四小学校	教諭	神原 あゆみ	日野第七小学校	教諭	葛貫 裕介
仲田小学校	教諭	高島 笑里	東光寺小学校	教諭	坂井 友里
日野第一中学校	教諭	磯 美智代			

Bブロック委員

◎日野第三中学校	主幹教諭	青柳 玲子	夢が丘小学校	教諭	塩原 仁子
○潤徳小学校	主任教諭	松延 康男	日野第八小学校	教諭	栗原 正世
七生緑小学校	育休代替教諭	若木 伊織	三沢中学校	主幹教諭	廣瀬 尊貴

Cブロック委員

◎七生中学校	教諭	松木 舞	日野第二小学校	教諭	五十嵐 優子
○平山小学校	教諭	橋爪 恭子	南平小学校	教諭	内田 聡
滝合小学校	教諭	富樫 彩	平山中学校	教諭	大川 京子

Dブロック

◎日野第二中学校	主幹教諭	竹村 きよみ	日野第三小学校	教諭	窪内 直人
○日野第五小学校	教諭	吉谷 優見	日野第六小学校	教諭	渋澤 雄太
旭が丘小学校	教諭	宮山 雅子	日野第四中学校	教諭	上川 陽子

日野市教育委員会 指導主事 佐藤 正明

日野市立教育センター 基礎調査研究係 原田 由美子

5 教育資料・広報係

I 教育資料の管理及び活用

1 教育資料室の役割と問題点

(1) 教育資料室の役割

日野市立教育センター設置条例第4条（6）によれば，教育センターの事業の一つは，「教育の資料と情報の整備，保守及び活用に関すること」である。センター教育資料室の所有する教育用図書や文書を所内だけでなく，日野市内の幼稚園，小学校，中学校の教職員が活用できるようにし，日々の教材研究の充実や教育研究・実践に役立たせるようにする必要がある。本年度は，係として教育センター教育資料室の状況を見返し，課題を明らかにして，学校や日野市の教育にとってどうしたらよいか，既存のシステムを効果的に活用する管理・運営について検討・改善を進めてきた。

(2) 現状の問題点

①教員など教育関係者の活用状況

教育センターは，学校教員対象の研修施設であるが，併設する教育資料室は，教育専門資料を多数所有し，本来有用性の高い機関である。

右の表のように，各種の教育書がそろっている。

しかし，教員への貸出件数は少なく，センター教育資料室の存在すら知られていない実態があると思われる。従って教育専門書をはじめとする図書資料や授業研究記録などの教育資料の状況や貸し出しの方法がどう行われているかが知られていない状況がある。

活用されない原因はいくつか考えられる。

- i 教育資料室の存在そのものや貸し出しなど活用の方法などが知られていない。
- ii センター教育資料室の蔵書の検索を行う方法が知られてなく，活用するきっかけがない。
- iii 学校から遠い外部機関であり，必要な教育資料を得るために出張することは，学校の現状においては考えられない。
- iv センター教育資料室の教育用図書は古いものが多くまた更新されていないので，利用者にとって活用の効果が低いと思われる。

日常的には，センター所員が，初任者などの若手教員の研修のために参考資料を得て役立てている。

教科用図書採用の検討時期は見本本が展示されるので比較的来室者が多いが，普段はないといえる。教育センターの市民の財産としての活用が十分になされているといえない。

センター教育資料室の蔵書数

教育一般	4 2 5
教育心理・相談	3 2 8
学習指導要領・指導書	多 数
授業論・授業の進め方	1 0 2
学級経営・学級作り	1 2 2
生活指導・進路指導	6 5
国語教育・古典他資料	2 6 4
社会科教育	2 5 7
算数・数学教育	2 6 8
理科・生活科教育	2 1 6
音楽・図工・美術教育	8 2
体育科教育	9 6
道徳	1 2 2
外国語活動	2 4
総合的な学習の時間	3 2 1
特別活動・関連資料	1 2 5
学校劇	7 1
幼稚園教育・保育	3 1 5
特別支援教育	8 0
家庭教育	5 1
保健指導	1 0 1
道徳	1 2 2
総資料数（A Vを含む）	4 8 0 0

2 教育センター教育資料室の資料管理の改善の取り組み

本年度、教育資料・広報係は、上記の課題認識のもと、次のような目標と作業を行ってきた。

(1) 書籍・資料の徹底した管理

- ①パソコンの図書管理システム（探調ツール）を使用して、すべての所有する書籍・AV資料を登録し、貸出・返却、検索などの管理ができるようにする。
- ②教育活動や教材研究・研修にそって配架し、来室者・担当の係が目的の図書や資料を見つけやすいようにする。
- ③授業研究文書のファイリング・電子データ化を行い、活用しやすくする。（次年度）

(2) 市立小・中学校教員の教育センター教育資料室の活用体制

多忙といわれる教員は学校から離れずに必要な研修情報を得られることが求められている。その意味で、センター教育資料室は、教職員の研修機能を補う施設として、情報ネットワークを活用した教育情報センター・電子図書館としての機能をもつことが求められる。具体的には、市内教員が学校の図書室の図書管理システム（探調TOOL）のうち「横断検索システム」（市内小中25校＋教育センター間設置）において、他校・教育センターの教育資料を検索し、貸出・返却の手続きができるようにする。

(3) 教育センター資料室の活用法の周知

市内教職員へ周知し、活用を促す。（校務支援システム・センターだより等）

3 教育センター教育資料室の活用

(1) 学校での検索の仕方

「横断検索システム」による、教育センター図書室の図書の検索

学校の「横断検索システム」のための固有のユーザー名、パスワードを入力する。

(2) 書名・著者名・キーワードを入力し、教育センターを検索の対象にする。

(3) 校務支援メール・電話による貸出依頼及び交換便による貸出・返却を行う。

横断検索システムの画面

4 今後の課題

(1) 教育資料の更新

教育センター教育資料室は教育に関する資料が多数あるが、残念ながら古いものが多いことは否定できない。教育センターの1部門としての予算の制約のもと、教育用図書が購入される。また、学習指導要領がほぼ10年を一区切りにして改訂されてきている中、特に指導関係の資料が更新されない状況がある。社会の流れと共に教育についての考えや知識は変わるが、変わらない知識概念や方法も多数ある。それらの提供を今後行うと共に、新しい教育用資料の更新ができないか、工夫が求められている。

(2) 教員に使いやすい図書管理

市立小・中学校の教員には、図書室のパソコンによる「横断検索システム」を使って、教育センターの教育資料を検索し、交換便による貸出・返却をするシステムを今回紹介したが、できれば、その教職員が日常的に使用しているパソコンに「横断検索システム」を導入できればと考えられる。（セキュリティなどの面で問題があるとのことである。）

(3) 小・中学校の授業記録・研究紀要・周年行事資料などの管理と活用

教育センター教育資料室には、日野市教育委員会が保存してきた膨大な文書がある。市内の学校の歴史や学校の校内研究紀要や市レベルでその時々設置された研究委員会の発行した文書や学校便り、学校要覧などがある。これらは、整理されれば、日野市の学校や教育の歴史の資料となるものである。また、授業記録なども多数あり、データベース化され情報サービスとして学校に提供されれば教育活動に役立つのではないと思われる。

Ⅱ 広報活動

1 「教育センターだより」の企画・編集

6・11・3月の年間3回発行し、市内公立幼・小・中学校の全教職員と市内外関係諸機関に配布している。主に本センターの事業活動の紹介を行い、成果の普及と事業の理解を図るた

っている。内容は、調査研究事業の経過報告や成果・課題、研修部の活動紹介、教育相談部の活動状況・成果の紹介などである。

<平成23年度「教育センターだより」の主な内容>

第24号 6月

- ・巻頭言 教育センター所長 加島 俊雄
- ・調査研究部事業部 – 1年間の課題と事業計画を中心に–
 - (1)ICT教育推進研究 (教育経営係) ICT活用研究委員会
 - (2)理科教育推進研究 (教科等教育係) 理科教育研究推進委員会
 - (3)郷土教育推進研究 (ふるさと教育係) 郷土教育推進研究委員会
 - (4)ひのっ子教育21開発研究 (基礎調査研究係) ひのっ子教育21開発委員会
- ・研修部 – 担当する若手教員研修の計画と年間の研修会の紹介–
- ・相談部 – 1年間の課題と事業計画を中心に–
 - (1)一般教育相談 目的・内容、1年間のおもな取り組み
 - (2)学校生活相談 適応指導(わかば)教室 eラーニング、登校支援

第25号 11月

- ・巻頭言 日野市教育委員会参事 大野 正人
- ・調査研究部 – 年度途中の経過報告を中心に –
- ・研修部 – 若手教員研修(1・2年次教員、授業力向上研修(4年次))を中心に–
- ・相談部 – 年度途中の経過報告を中心に –
- ・教育資料・広報係 新規購入の本の紹介・センターWebサイトの紹介

第26号 3月

- ・巻頭言 日野市教育委員会教育委員 西田 敦子
- ・調査研究部 – 年度の総括・課題を中心に–
- ・研修部 – 日野市教育委員会主催研修会–
- ・相談部 – 年度の総括・課題を中心に–
- ・教育資料・広報係 教育資料室の活用、センターWebサイトによる広報活動

2 教育センター紀要の発行

教育センターの調査研究事業、教職員研修活動、教育相談活動など、それぞれの成果と課題を明らかにし、その普及と活用の促進を図るために、年に1回センター紀要を発行し、市内公立幼・小・中学校の全教職員と市内外関係諸機関に配布している。本年度の発行は、平成24年5月を予定している。なお、センター紀要のバックナンバーは、本センターのWebサイトで見ることができる。

3 教育センターの Web サイト

本年度の教育センターの事業の重点では、「・・・，学校等へ必要な情報を随時提供できる“情報教育センター”としての機能の充実を進める」としている。これらを具体化するべく進めてきた。

(1) Web サイト運営の趣旨

① 教育センター事業の広報の役割

情報ネットワークが高度に発達し、インターネットが広く普及してきている今日、Web サイトのような即時性、記録性のある情報伝達手段を活用することが広報活動の基本になってきている。教育センター事業の活動状況や成果を広く学校関係者や市民に知らせることは意義深いと思われる。

日野市立・幼稚園、小・中学校にCMSのソフトウェアが導入され、その後、平成20年には教育センターもWebサイトの開設をした。アクセスの数は学校などと比較して多いとはいえないが、公開の資料のダウンロード回数は徐々に増えつつある。

② 教師の授業力向上・授業支援

教育センターの役割は、日野市の教育の進行や教育へのニーズに応えることにある。時代の流れの中で、教育情報はインターネットをはじめとする情報ネットワークを通して、教育関係者が容易に情報を獲得し、すぐに活用できる環境を整えることが可能な状況になってきた。学校の教育活動の充実を図るために、センターが学校へ教育活動に役立つ情報を提供し、教員が学校にしながら授業の指導案や指導資料を入手活用して、次の日の指導に役立たせるような研修機能の役割が求められている。

この数年、センター教育資料・広報係は、センターの広報に加え、市内の小・中学校が校内研修活動として行っている校内研究の研究紀要・集録を紹介してきた。また、本年度は、日野市教育委員会研究奨励校の研究の概要を紹介するとともに、希望者には画面上から、研究紀要・集録を電子ファイルをダウンロードできるようにした。

(2) センターWebサイトのおもな内容

① 教育センターの概要

○調査研究部・研修部・相談部事業の紹介

○教育センター紀要他（現在参照できるファイル）

- ・教育センター要覧
- ・教育センター紀要
- ・教育センター便り

② 「郷土日野」指導事例

第1～6集，図版資料活用集

③ 市内小中学校「校内研究紀要・集録」

（平成22年度）の概要紹介（16校）

④ 教育相談室から（東日本大震災に伴う子どもの心のケア） 他

(3) アクセスの方法

本センターのサイトを見るには以下の2つの方法がある。

- ①検索サイトで、「日野市立教育センター」と入力し、アドレスを知る。
- ②サイトアドレス欄に、「<http://www.hino-tky.ed.jp/center/>」を入力する。
- ③「日野市役所」のWebサイト、「日野市ICT活用教育推進室」からリンクする。

教育センター紀要（平成22年度版）	285
教育センター便り第25号（昨年12月）	46
郷土日野指導事例 第6号（昨年1月）	392
ひのっ子教育21開発委員会中間報告 （外国語活動，昨年5月）	859

公開資料のダウンロード回数（平成24年2月21日）



B 研修部の事業

1 教職員研修係

教職員研修係

1 日野市教育委員会主催研修会への支援

日野市教育委員会学校課が計画した日野市立幼稚園・小学校・中学校教員の研修会を開催する上で、教育センター研修係に依頼された受付・会場表示、募集業務、受付名簿作成、会場設営等の支援を行った。



7月21日教科専門研修（全体会）

月	日	研 修 会 名	内 容 等	会 場
4	8	若手教員育成研修連絡会	若手教員（1年次・2年次）の研修等について	日野第七小学校
4	12	CRT 事前説明会	CRT の実施に向けて	教育センター講堂
4	18	少人数担当者連絡会	少人数指導の在り方と計画について	教育センター講堂
4	19	若手教員育成研修（1年次）	開講式・研修概要説明 講話	教育センター講堂
5	19	教育課題（評価）研修会	CRT 結果の活用及び授業改善の手立て	教育センター講堂
5	24	若手教員育成研修（1年次）	学級経営の意義と指導、児童生徒理解の在り方	教育センター講堂
6	2	食育リーダー研修会	食育の推進について	教育センター講堂
6	7	授業力向上研修Ⅱ（4年次）	4年次教員として身に付けたい力	教育センター講堂
6	9	I C T活用管理職研修会	日野市における ICT 活用の取組について	教育センター講堂
6	9	若手教員育成研修（2年次）	学級経営、教科経営の基礎と実際 授業リフレクションについて	教育センター講堂
6	10	授業力向上研修Ⅰ（3年次）	学級経営、教科経営の実際 授業リフレクションについて	教育センター講堂
6	21	若手教員育成研修（1年次）	社会人として身に付けるマナー（マナー・接遇）	教育センター講堂
7	5	若手教員育成研修（1年次）	指導案検討、模擬授業	教育センター講堂
7	21	教科専門研修（全体会）	習得・活用・探究と楽しい授業づくり 他	市民会館大ホール
7	22	学校組織マネジメント研修Ⅰ	学校経営の改善と組織力の向上	教育センター講堂
7	22	学校組織マネジメント研修Ⅱ	学校経営の改善と組織力の向上 副校長として果たす役割	教育センター講堂
7	26	人権教育研修会	ハンセン病問題への理解と偏見・差別の解消に向けた取組	教育センター講堂
7	28	理科実技研修会	「エネルギー」「粒子」「生命」「地球」の単元に関わる実技研修	日野第四小学校
7	29	理科実技研修会	「生物と環境」の単元に関わる観察・実験とデジタル教材の活用	日野第四小学校
7	29	外国語活動研修会	授業で使える英語表現、指導法	教育センター講堂
8	1	理科実技研修会（課題別）	「発電と電気の利用」「電磁石のはたらき」に関わる実技研修	富士電機(株)能力開発センター
8	2	郷土教育研修会	フィールドワークとまとめ	潤徳小学校
8	4	教育相談研修会	教育相談（事例検討）	教育センター会議室
8	18	特別支援教育基礎研修 A B	発達障害の基礎・基本、特別支援教育の理解	明星大学
8	19	特別支援教育基礎研修 C	発達障害児への対応	明星大学
8	19	特別支援教育専門研修①	医学的対応の基礎	明星大学
8	22	特別支援教育専門研修②	アセスメント（W I S C -Ⅳ）	明星大学
8	23	昆虫スキルアップ研修会	昆虫の行動観察・採集・飼育法について	多摩動物公園
8	24	若手教員育成研修（2年次） 授業力向上研修Ⅰ（3年次）	授業リフレクション	日野第一中学校
8	25	学校組織マネジメント研修Ⅲ	O J T 研修	教育センター講堂
8	29	主任教諭研修（新任）	学校組織を活用した課題解決	教育センター講堂
9	9	道徳教育推進研修会	授業研究- 47年道徳	日野第四中学校

月	日	研 修 会 名	内 容	会 場
9	12	少人数担当者連絡会	確かな学力を身に付ける少人数習熟度別指導 授業研究 3年算数	滝合小学校
9	20	若手教員育成研修（1年次）	授業研究 1年理科	日野第三中学校
9	30	リソースルーム研修会	リソースルームで活用できる教材の発表	教育センター講堂
10	6	食育リーダー研修会	事例研究（グループ協議）	教育センター講堂
10	11	若手教員育成研修（1年次）	授業研究 1年算数	日野第四小学校
11	22	若手教員育成研修（1年次）	授業研究 2年美術	三沢中学校
12	6	若手教員育成研修（1年次）	授業研究 3年国語	滝合小学校
1	17	若手教員育成研修（1年次）	教育相談の手法とかかわり方を学ぶ	教育センター講堂
1	20	若手教員育成研修（2年次）	学校における様々な課題への対応	教育センター講堂
1	26	授業力向上研修Ⅰ（3年次）	学校における様々な課題への対応	教育センター講堂
1	26	食育リーダー研修会	食育年間指導計画の作成について	教育センターPC室
2	21	若手教員育成研修（1年次）	教育実践発表会	教育センター講堂
2	24	学校組織マネジメント研修Ⅲ	主幹教諭としてのマネジメント力	教育センター講堂

この他、教務主任研修会 生活指導主任研修会、研究主任研修会、保健主任研修会、ICT活用推進委員会、司書教諭連絡会、特別支援学級担任会、幼保小連携教育推進委員会、人権教育理解推進委員会、副籍事業連絡会、体力向上推進委員会、教育課程説明会、教育課程届出相談会の支援を行った。

2 若手教員育成研修（1・2年次）・授業力向上研修（3・4年次）

（1）個別指導

教育センターは、若手教員の育成に取り組んでいる。今年度は、研修部専任2名と他の職務を兼任する所員5名の計7人で分担し、下の表のように、若手教員の授業観察及び指導を個別に行った。

研 修 名	対象人数	依 頼 さ れ た 内 容
若手教員育成研修（1年次）	47	年3回の授業観察及び指導の実施と報告
若手教員育成研修（2年次）	34	年1回の授業観察及び指導の実施
授業力向上研修Ⅱ（4年次）	33	年1回の授業観察及び指導の実施

（2）グループ指導

①若手教員育成研修（2年次）

②授業力向上研修Ⅰ（3年次）

8月24日（水）、日野第一中学校を会場に、若手教員育成研修（2年次）を午前に、授業力向上研修Ⅰ（3年次）を午後に行った。

若手教員育成研修（2年次）・授業力向上研修Ⅰ（3年次）ともに、3～5名のグループに分かれ、グループ内で、それぞれが1学期に実践した授業実践1事例を指導案、重点5項目リフレクションシート、ビデオ等で発表し、実践について協議を行った。

今年度は、教育センター研修部から6名、研修部外から2名の計8名の所員が参加し、担当したグループの協議について指導助言を行った。



8月24日2・3年次 グループでの研究協議

3 若手教員育成研修(1・2年次)・授業力向上研修(4年次)の個別指導から

1年次教員には、日野市教育委員会より「これを読めばすべてわかる！教職生活スタート読本」が配布されている。その中には、下記の内容が記載されている。この内容を見てもわかるように、教員として身につけなければならない内容は多岐にわたる。

第1章	日野市の重点施策		
1.	I C T活用教育	2. 特別支援教育	3. 保・幼・小・中の連携
第2章	社会人として		
1.	もつべき常識とは	2. 好ましい服装・身だしなみとは	
3.	接遇のありかた	4. 身につけたい人権感覚	
第3章	教員として		
1.	服務	2. 人事考課制度とは	
第4章	学級経営		
1.	学級通信の出し方	2. 整えたい教室環境とは	3. おさえない学級での指導とは
4.	学級事務のいろいろ	5. 学級経営案のポイント	
第5章	授業		
1.	授業の準備	2. 授業の進め方	3. 授業後の振り返り
第6章	生活指導		
1.	児童生徒との信頼関係	2. 生活指導の手順	
3.	安全指導	4. さまざまな連携	
第7章	校 務		
1.	校務支援システム	2. 管 理	3. さまざまな会議
第8章	保護者等対応		
1.	保護者会等のもち方	2. 望ましい報告・連絡・相談、苦情対応	
第9章	地 域		
1.	大切な地域とのかかわり		
第10章	その他		
1.	部活動指導におけるポイント	2. 生徒会・委員会活動(中学校)	

「これを読めばすべてわかる！教職生活スタート読本」(平成22年3月 日野市教育委員会教育部学校課発行)

「若手教員育成研修(1・2年次)・授業力向上研修(4年次)」の個別指導を、1年次は年間3回、2・4年次は年間1回、各1単位時間の授業観察及び指導を行った。だが、そこで指導できることには限りがある。

学校から送付された「指導案」と「当日の授業観察を通して見取ったこと」をもとに、該当教員の取り組みを励まし、意欲を引き出すとともに、上記「第5章 授業」を中心として、よりよい授業の実施に向けて具体的な指導を行ってきた。

指導を行った主な視点を整理すると、下記のような内容がある。

(1)指導の視点

- ①学校教育目標、学年・学級目標が適切に掲示されているか。また、学習の成果や学習の進捗に伴う作品の展示等、生き生きとした教室環境づくりがなされていたか。
- ②教師と子どもたちの関係が、温かい雰囲気を保ちつつ、規律ある関係を保っていたか。
- ③教材研究を的確に行い、子どもたちの生活体験、既習内容等の実態に応じた指導のねらいを設定し、計画的に授業を展開していたか。
- ④興味・関心・問題意識を高める授業への導入の工夫、適切な教材・資料の準備がなされていたか。
- ⑤教師からの一方的な知識・技能の伝達ではなく、子どもたちが主体的に概念・原理を獲得する過程を重視した学習展開、子どもたち自身が課題意識を抱き、追求し、問題解決能力を育てる授業づくりがなされていたか。
- ⑥隣り合う席やグループでの学習等を取り入れている場合、適切に活用されていたか。
- ⑦子どもたち一人一人が取り組んでいる状況を把握して、学習展開を進めていたか。
- ⑧授業を通して学習の喜びを感じ取らせていたか。また、次時の学習への期待を高めるまとめを行っていたか。

(2) 個別指導の実施

授業観察および指導を次のように行ってきた。

- ①教育委員会から受け取った研修対象者（以下「研修生」）一覧をもとに、教育センター研修部で、研修生の指導分担を決定。
- ②教育委員会から各学校へ、「各研修生の教育センター指導担当者一覧」が通知された後、該当校へ連絡し、授業観察及び指導の実施日時を決定。
- ③研修生に連絡し、教科、単元、授業構想を確認する。
- ④授業構想に課題があるときは、必要に応じてアドバイスする。

例「〇〇」の単元で、△△などを、それぞれのグループで調べ・まとめ・発表したいと思っています。その発表の時間をみていただきたいと思います。

⇒ グループの発表のみで終わる授業は、〇〇の授業ではありません。子どもたちが写真を見て、わかったこと、思ったことを発表した後の話し合いから△△の授業が始まります。話し合う過程で疑問が生まれ、課題に気づき、追求が始まるのです。問題解決型の学習へ展開を工夫してください。

そのためには、本時のねらいに到達できるような適切な資料が必要です。〇〇好きの子どもを育成するためには、適切な資料を提示すること、様々な学習活動を工夫すること、話し合い活動を活発にさせることが必要です。教師が前面に出て知識を伝達するのではなく、教師の出番を減らし、子どもと共に授業を進めていくことが重要だとアドバイスする。

- ⑤送付されてきた指導案をもとに、具体的な改善点・指導上の留意点がある場合は授業前にアドバイスする。

例 <学習指導案から>

ア 児童の実態と単元・本時の目標

- ・一人一人を生かす。（〇〇の教科が嫌いな子どもたち△△人への対応）

イ 指導計画と本時の位置づけ

- ・指導計画を重視する（特に第1時）

ウ 学習活動と内容

- ・〇〇の教科を好きにする学習活動 資料とノート、作品

エ 本時の展開（学習過程）

- | | |
|-----------------|-------------------|
| (i) 導入（つかむ） | ・本時の課題把握 |
| (ii) 展開（調べる） | ・学習活動、学習形態 |
| (iii) まとめ(まとめる) | ・ノート、子どもの発言、作品、板書 |

オ 指導と評価の一体化

カ 授業の流れの確認

- | |
|--------------------------|
| (i) 本時の目標を達成できるか |
| (ii) 学習活動、学習形態の工夫がされているか |
| (iii) 発問、提示資料は適切に行えるか |

- ⑥当日の授業観察及び指導の実施

(3) 個別指導の今後の課題

①若手教員育成研修・授業力向上研修(4年次)における個別指導の回数は、今年度の研修生数の場合、小・中学校合わせて延べ208回になる。今後は更に増えることが予測される。だが、授業観察及び指導を実施できる日は、長期休業や学校行事等の事情で限られる。研修部専任及び他の職務を兼任する研修部員の個別指導の回数が過大にならないよう対応を考えていく必要がある。また、授業に関する指導は、専門性のある指導者が行った方がより心に響く指導を行うことができる。教育センター所員の専門性を発揮する実施体制の工夫も行っていきたい。

②個別指導の充実を図るには、前項「(2)個別指導の実施の③～⑤」のように、1回の授業観察の機会を大切にすることが必要である。できれば、授業観察終了後、本時の課題・今後の課題を明確にし、継続して、研修生の授業づくり・学級づくりを支援することも重要であると考えられる。

③今年度の若手教員育成研修(2年次)の個別指導は、各学校で行う研究授業の中の1回を教zセンター研修部が担当した。今後、更に要請が増えることも考えられる。その体制づくりを行っていく必要がある。

資 料

日野市立教育センター設置条例・施行規則

日野市適応指導教室設置要綱



「教育センター教育紀要」 1～7集

設置条例・施行規則

1 日野市立教育センター設置条例

(設置)

第1条 日野市における教育の充実及び振興を図るため地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和31年法律第162号）第30条の規定に基づき、日野市立教育センター（以下「教育センター」という。）を設置する。

(名称及び設置)

第2条 教育センターの位置は、日野市程久保550番地とする。

(管理)

第3条 教育センターは、日野市教育委員会（以下「教育委員会」という。）が管理する。

(事業)

第4条 教育センターは次の事業を行う。

- (1) 幼児、児童及び生徒の教育についての調査研究並びに学校教育、社会教育及び家庭教育の連携に関すること。
- (2) 教育における専門的、技術的事項の調査研究及び普及に関すること。
- (3) 学校教育及び社会教育関係者の研修に関すること。
- (4) 教育相談及び学校生活相談に関すること。
- (5) 不登校児童及び生徒に対する相談及び援助に関すること。
- (6) 教育の資料と情報の整備、保存及び活用に関すること。
- (7) 前各号に掲げるもののほか、教育委員会が必要と認める事業。

(職員)

第5条 教育センターに所長その他必要な職員を置く。

(休館日)

第6条 教育センターの休館日は、次のとおりとする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、休館日を変更し、又は臨時に休館日を設けることができる。

- (1) 日曜日及び土曜日
- (2) 国民の祝日に関する法律(昭和23年法律第178号)に定める休日
- (3) 1月2日から同月4日まで及び12月28日から同月31日まで

(開館時間)

第7条 教育センターの開館時間は、午前8時30分から午後5時15分までとする。ただし、教育委員会が必要と認めるときは、これを変更することができる。

(運営審議会)

第8条 教育センターの運営について必要な事項を審議するため、日野市立教育センター運営審議会（以下「審議会」という。）を置く。

(審議会の委員)

第9条 前条に規定する審議会の委員（以下「委員」という。）の定数は、10人以内とし、次に掲げる者のうちから教育委員会が委嘱又は任命する。

- (1) 学校教育関係者
- (2) 社会教育関係者
- (3) 教育行政機関関係者
- (4) 学識経験者
- (5) その他教育員委員会が必要と認める者

(委員の任期)

第10条 委員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

2 前条第1号から第3号までに掲げる者から選出された者の任期は、その在職期間とする。

3 委員が欠けた場合の補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長及び副委員長)

第11条 審議会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選によりこれを決定する。

2 委員長及び副委員長の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

3 委員長は、審議会を主宰する。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故あるとき又は委員長が欠けたときはその職務を代行する。

(招集)

第12条 審議会は、必要に応じて委員長が招集する。

(議決)

第13条 審議会は、委員の半数以上が出席して成立し、その議事は、出席委員の過半数をもってこれを議決する。

(委任)

第14条 この条例の施行について必要な事項は、教育委員会が規則で定める。

付 則

(施行期日)

1 この条例は、平成16年4月1日から施行する。ただし、次項の規定は、教育委員会が規則で定める日から施行する。(日野市立教職員研究室設置条例の一部改正)

2 日野市立教職員研究室条例(平成5年条例第22号)の一部を改正する。〔次のよう〕略
(日野市特別職の職員で非常勤のものの報酬及び費用弁償に関する条例の一部改正)

3 日野市特別職の職員で非常勤のものの報酬及び費用弁償に関する条例(昭和38年条例第13号)の一部を次のように改正する。

〔次のよう〕略

付則(平成19年条例第28号)

この条例は、平成20年4月1日から施行する。

2 日野市立教育センター設置条例施行規則

(目的)

第1条 この規則は、日野市立教育センター設置条例(平成15年条例第46号)の施行について必要な事項を定める事を目的とする。

(職員)

第2条 日野市立教育センター(以下「教育センター」という。)に所長のほか、次の職員を置くことができる。

(1) 主任研究員 (2) 事務長 (3) 専門職員 (4) その他必要な職員

(所長の任務)

第3条 所長は、上司の命を受け、教育センターの事務をつかさどり、所属職員を指揮監督する。

2 所長は、次の事項を専決する。

(1) 教育センター運営の実施計画に関すること。

(2) 主任研究員及び事務長の出張、研修命令及び休暇に関すること。

(3) 教育センター全体に係わる定例的な事項に関する報告、公表、申請、照会、回答、諮問及び通知に関すること。

(主任研究員、事務長及び職員の任務)

第4条 主任研究員は、所長の命を受け、調査研究、研修及び相談業務をつかさどり、所属職員を指揮監督する。

- 2 事務長は、所長の命を受け、教育センターの庶務事務をつかさどり、所属職員を指揮監督する。
- 3 主任研究員及び事務長の専決事項については、日野市教育委員会事務局事務決裁規程（平成16年教育委員会規則第7号）第9条の規程を準用する。
- 4 専門職員その他の職員は、上司の命を受け、教育センターの事務に従事する。
（部及び事務分掌）

第5条 教育センターの部及び事務分掌は、次のとおりとする。

調査研究部

- (1) 学校制度及び学校経営の調査研究に関すること。
- (2) 教育課程の調査研究に関すること。
- (3) ふるさと（郷土日野）教育の調査研究に関すること。
- (4) 生涯学習の調査研究に関すること。
- (5) 教育資料の収集、提供及び教育広報に関すること。
- (6) 前号に掲げるもののほか、調査研究に関すること。

研修部

- (1) 学校教育職員の研修に関すること。
- (2) 社会教育者（地域リーダー）の研修に関すること。
- (3) 前2号に掲げるもののほか、研修に関すること。

相談部

- (1) 幼児、児童及び生徒の教育相談並びに教職員の相談に関すること。
- (2) 学校生活（適応）についての相談及び援助に関すること。
- (3) 電話等による教育相談に関すること。
- (4) 前3号に掲げるもののほか、相談に関すること。

事務部

- (1) 教育センターの庶務に関すること。
 - (2) 他の部に属さない事務に関すること。
- （委任）

第6条 この規則に定めるもののほか必要な事項は、教育長が別に定める。

付 則

この規則は、平成16年4月1日から施行する。

「日野市適応指導教室設置要綱」

（目的）

第1条 この要綱は、さまざまな要因により学校生活に適応できず、長期間の欠席状況にある児童・生徒に対して社会的自立及び学校復帰の援助を図ることを目的とする。

（設置）

第2条 前条の目的を達成するために、適応指導教室を設置する。

- 2 適応指導教室の名称は「わかば教室」とする。

第3条 第1条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 一人ひとりの児童・生徒に応じた社会的体験や学習活動を援助し、精神的な安定、好ましい人間関係、集団への適応能力、学習意欲、望ましい生活習慣等の回復を図る。
- (2) 学校不適応児童・生徒の理解や対応のあり方について、学校及び保護者との相談を行う。
- (3) 学校、日野市教育相談室、スクールカウンセラー、その他関係機関との連携を図る。
- (4) その他、教育長が必要と認める事業を行う。

(組織)

第4条 適応指導教室は、日野市立教育センターが所管し、指導員及びカウンセラーを置く。

(入室対象者)

第5条 入室対象者は、次の要件を満たす児童・生徒とする。

- (1) 日野市公立小・中学校に在籍する児童・生徒
- (2) 不登校及びその傾向にある児童・生徒
- (3) 保護者及び本人が入室を希望し、日野市教育委員会教育部学校課長（以下「学校課長」という。）が認めた児童・生徒

(開設日及び開設時間等)

第6条 開設日は月曜日から金曜日とし、開設時間は9時から4時までとする。

ただし、日野市立教育センター所長（以下「センター所長」という。）が特に必要があると認めたときは、開設日及び開設時間を変更することができる。

- 2 日野市公立学校の休業日（都民の日及び在籍校の開校記念日を除く。）及び国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日は休業日とする。ただし、センター所長が特に必要があると認めたときは、この限りではない。

(通室)

第7条 通室方法や通室往復途上の安全確保については、保護者の責任において行う。

(入室・退室手続き)

第8条 入室を希望する児童・生徒の保護者は日野市適応指導教室入室願（第1号様式）を在籍校の校長に提出する。

- 2 前項の規定による届出を受けた校長は日野市適応指導教室入室申請書（第2号様式）を学校課長に提出する。
- 3 学校課長は、入室の可否について、児童・生徒の在籍校の校長、指導主事及び適応指導教室指導員が協議した結果をもとに決定する。
- 4 学校課長は入室を許可した場合は、入室許可書を学校長とセンター所長に通知する。（第3号様式）
- 5 退室する場合は、保護者は日野市適応指導教室退出願（第4号様式）を在籍校の校長に提出する。
- 6 前項の規定による届出を受けた校長は日野市適応指導教室退室申請書（第5号様式）を学校課長に提出する。
- 7 学校課長は退室を許可した場合は、退室許可書を学校長とセンター所長に通知する。（第6号様式）

(学校との連携)

第9条 センター所長は在室児童・生徒について、通室状況報告書（第7号様式）を作成し、在籍校の校長に報告する。

- 2 在籍校の校長は、学校の教育計画や教育活動等をセンター所長に提出し学校復帰の協力をす

る。

(事故の対応)

第 10 条 適応指導教室の管理下で通室児童・生徒に事故が発生したときは、在籍校の校長はセンター所長からの事故報告に基づき日本体育・学校保健センターの医療費等の支給を申請する。

(委任)

第 11 条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は他に定める。

付 則

この要綱は、平成 12 年 4 月 1 日から施行する。

付 則 (平成 15 年 6 月 2 日)

この要綱は、平成 15 年 6 月 2 日から施行する。

付 則

この要綱は、平成 16 年 4 月 1 日から施行する。

編集後記

平成23年度日野市立教育センター紀要「第8集」を発刊する運びとなりました。

教育センターは、日野市の新たな教育課題や施策に活かし得るシンクタンクとして、微力ながらも日野市の教育の発展につくしてきました。

現在、調査研究部、研修部、相談部の三つの部を中心に事業を行っております。毎年、事業内容及び成果をお知らせするため、調査研究部については毎年2月に研究発表会を行うと共に、センター全般の事業については、教育センター紀要としてまとめてまいりました。どうぞ高覧いただければ幸いです。

本年度、日野市立教育センター事業および、同紀要発刊に関して温かくご指導いただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

最後になりましたが、ご多忙のところ「教育センターへの期待」のテーマで原稿をお寄せいただきました教育長米田裕治先生をはじめ、各部の報告をまとめるためにご協力いただいた地域の皆様、市内の各機関の皆様方に心よりお礼申し上げます。

<編集委員>

編集長
教育センター所長

加 島 俊 雄

主任研究員

大 野 正 人

指導主事

小 林 邦 子

事務長

渡 辺 秀 樹

教育センター所員

原 田 由美子

教育センター所員

二 馬 誠志郎

教育センター所員

依 田 明

教育センター所員

佐 藤 清 隆

教育センター所員

柳 元 太 郎

教育センター所員

河 野 和 昌

日野市立教育センター紀要 第8集

発行日 平成24年3月31日
発 行 日野市立教育センター
所長 加 島 俊 雄
〒191-0042 日野市程久保 550
TEL 042-592-0505
FAX 042-592-1148
Eメール : k-center@city.hino.lg.jp
URL : www.hino-tky.ed.jp/center/

